

軽音×恋愛の奏者 巻頭に参戦  
初恋とともに 春屋アロヅ  
Lagado Fukapon 川鶴鶴脇 なぎ

祝1周年 特大ボリュームで贈る合同コピー誌  
深夜3時間で印刷/製本できるパートナー募集中

mnfikmyhk/**CREATURE**/**MIXING** 3  
*Five*      *S*

「さようなら、五月病」  
彼女はきっと、泣いていた

mnfikmyhk  
CREATURE MIXING 3  
**five**

2009年5月31日 初版発行  
2009年8月16日 第2版発行

発行所 まにふいくみやはか  
<http://www.projectkaigo.org/>

印刷／製本 project KAIGO

Copyright © 2009 春屋アロゾ, 川鵜鶴肋, なぎ, Lagado, Fukapon,

まにふいくみやはか

この本は Creative Commons「表示 2.1 日本」ライセンスに従い頒布されます。  
詳細は <http://creativecommons.org/licenses/by/2.1/jp/> をご覧ください。

5分待つ勇気もないくせに――

彼女は笑って、待っていた。

僕は単純に、凄いなって思った。

# 難解辛苦 テーマが悪いと思いました

## 春屋アロヅ

三回目にて初参加です。テーマ見た瞬間に居酒屋でダベってる五人が思い浮かんだので書いてみたら、そのうち二人しか出てきませんでした。……あれ?

<http://third.system.cx/>

## Lagado

幼少の頃、百貨店屋上の遊具スペースで開催された「〇〇レンジャーショー」とかで、5人組の戦隊のうち2~3人しか登場しないことに純真なる疑問を覚えたものだ。あれは時間でも脚本でもなく、予算の問題か。

<http://www.k3.dion.ne.jp/~lagado/>

## 川鵜鶴助

長かった。楽勝だと思ったのに。第一稿あがったのが締め切り日の朝。誤字脱字その他ミスには是非目をつぶっていただきたく。5ですが7でもあり、なぜか双子祭り、そして全開です。意味なく細かい設定や妙なこだわりがたくさん詰まっていますのでいろいろ推理してみてください。指定キャラ、今回は無理だと思ってたんですが……

## なぎ

例によって未完という酷い有様ですが、文章を書くことに少しづつ慣れてきたような気がします。この原稿の残りの部分は夏コミまでに上げるようにします。テーマに絡めるのが面倒だったので五人兄弟という安直な設定になりました、代わりにオプショナルな設定のお姉さんを登場させました。なかなかいいキャラなのでこれからも登場させたいですね。

## Fukapon

何を書きたかったのかわからん……。と気付いた時点で書き直しが当然ですが、そんな時間はありません。そこで押し通してみました。今回も年齢高めの構成ですが、紬の口リップさのおかげでいつも通り私らしくなっております。あーゆー子がいたら可愛いなあって思うんですけど、いませんかね。いなきゃ私がなるしかないよね。

<http://www.fukapon.com/>

## レイアウト

今回は入稿早かったです。19時には揃っていました。この企画の趣旨を理解していただけているのだろうか。とか己の首を絞めるようなことは言わないことにしています。

## 印刷・製本

ページ数多すぎ! 嬉しいけど大変! その辺の複合機じゃ製本できないんだもん。

<http://www.projectkaigo.org/>

# CONTENTS

## 初恋とともに

春屋アロヅ ..... 03

## 伍人死んだらまたおいで

Lagado ..... 11

## 珠坂の女神

川鵜鶴助 ..... 15

## 東雲家五兄弟記録簿

なぎ ..... 70

## こんメイ!

Fukapon ..... 76

難解辛苦 ..... 99

CREATURE MIXING  
mnfikmyhk/3/five

# 2009-11-15/TKY will be released

## 初恋とともに

春屋アロツ

高校に入つてから一人暮らしをしている雅の家に美紀が来るのは珍しいことではない。お互いの家が近いこともあって、宿題を片付けたり、並んで映画を観たり、漫画を読んだり、と、放課後の何もないひとときをここで過ごすことはむしろ多い。

とはいっても、独りで住むには少々広い、家族用のマンションに暮らしている雅にとって、友人が遊びに来るのは嬉しいことだ。特にそれが美紀であれば、それ以上喜ばしいことはない。

「そいやうちの母親が最近多いって文句言つてたな」

年が明けてまだそれほど経っていないある日、夕飯の準備が済んで手を合わせるや、美紀がそんなことを言い出した。

「何がだ?」

「ここで飯食つたり泊めてもらつたりするのが。入り浸つたら迷惑だらうって」

美紀の母親が気にするのはわからないでもない。確かに秋頃からは一週間に一度は泊まつていくから、普通に考えたら明らかに多い。美紀も親の言うことだから、みたいな口調だが、自分自身も少なからず雅の反応を気にしているのが見て取れた。雅は表情を変えずに、静かに答えた。

「迷惑なわけがないだろう。今日みたいに夕飯の買い物手伝つてくれば十分だ」

だよなあ、なんて言いながら、ほっとした顔でシチュエースプレーを突っ込む。それを見て付け加えた。

「ああ、それから失敗作を片付ける手伝いもしてほしいな」

次のテーマは「買収」  
参加者募集中なの

締め切りは前日  
(と言いつつ当日まで待つよ!)

m CMX 4  
<http://www.projectkaigo.org/>

美紀の手がびたりと止まる。  
「……コレ、失敗作か?」

「食べればわかる」

わざわざそう言って、食べてみせた。そこそこの味だが、雅としては充分合格だ。だが、普段から表情をほとんど変えないいで、いくら付き合いが長いといつても、美紀には我慢しているかどうかまではわからないだろう。不安げに、それでも思い切ってスプーンをがばっと口に入れた。

「……なんだ美味しいじゃん。変な前置きするなよ!」

「私がそもそも料理下手なのは知ってるだろ。今日ははともかく、また失敗しないとも限らんから、その時は頑張れということだ」

「わかりづれーよ!」

「そうかもしれないな」

平然と言い放つと、美紀はじりじりと雅を睨みつけてから、表情を緩めて食べ始めた。雅もそれを見て、自分も一口目を口にした。

中学生の時、美紀と知り合ったばかりの頃は、まさかこんな関係になるとは思わなかつた。勉強は得意だが無口で感情表現に乏しい雅と、頭よりも体が動くタイプで口は悪いがよく笑う美紀とは、クラスと身長が平均より高いことくらいしか共通点がない。

それが、ちょっととした口論から美紀と同じクラスの男子とが教室でケンカを始めた時に縁が繋がつた。相手は他の男子に任せ、暴れる美紀を強引に引きはがしてそのまま教室の外に連れ出したのだ。それまで一度も口を利いたことのなかつた相手の突然の乱入に、その時の美紀は唖然としていた。

それ以来、お互い何とはなしに言葉を交わす機会が増え、進級する頃にはお互い親友と言つてはばかりないくらいに親しくなつた。その頃の美紀は今よりずっと不安定で、女子の友だちがほとんどいなかつた。その時に支えになれたことが、今の関係に繋がつてゐると思う。

当時は雅の両親もこの家に住んでいたから今のように泊まりに来ることはほとんどなく、代わりに美紀の家で、時には美紀の兄も巻き込んで遊ぶことの方が多い。

高校に入る間際に父親の転勤が決まった時、雅は頑として両親についていくことを拒み、三人で住んでいた家に一人残ることになつた。一人で暮らしていると少々の不便や煩わしさはあるが、それでも自分の決断は正しかつたと思う。こうして美紀と二人で過ごす機会を簡単に得ることができるのだから。

不意に雅の携帯が鳴つた。邪魔が入つた、という不満は液晶に表示された名前を見たらすぐに消えた。美紀にもそれが伝わつたらしい。

「誰？」

「綾乃だ。——もしもし？」

「あ、ミヤちゃん？ 今大丈夫？」

「ああ」

電話口から聞こえてきたのは、川合綾乃のかわいらしい声だつた。高校で出会つた、二人の大切な友だちだ。

『あのね、ミヤちゃん明日時間ある？ 今度カナちゃんの誕生日だから、プレゼント見に行きたいなって』

「わかった。ちょっと待つて』

美紀に綾乃の言葉をそのまま伝えると、美紀は自分の携帯を取つた。  
『明日は……五時半から練習だから、五時くらいまでなら大丈夫だろ』  
『もしもし。昼間なら私も美紀も大丈夫だ。夕方からは用事があるんだが』  
『うん、よかつた。……もしかして、ミキちゃんそこにいるの？』  
『ああ。代わろうか？』  
『うん、じゃちょっと代わつて？』

美紀に携帯を渡すと、美紀は満面の笑みを浮かべて話し始めた。小柄で華奢な彼女は、物腰が穏やかでいつも笑顔を浮かべているような子だ。彼女と話している時の美紀は頬が緩みっぱなしで、人目もはばからずに撫でたり抱きしめたり、と大騒ぎだ。雅が彼女と仲良くなつたのも、そもそもは美紀が彼女と仲良くなつたからだ。

正直に言つてうらやましいことこの上ないのだが、雅の目から見ても、綾乃は理想的な「かわいい女の子」だ。そばにいて嫌な気分になつたことなんて一度もないし、美紀のメロメロっぷりもよくわかる。だから美紀と引き離そうなどと考えたこともない。

『雅、代わるか？』

『いや、もうそのまま切つていい』

『ん……大丈夫だつてさ。じゃあまた明日な。——うん、お休み』

手元に戻ってきた携帯を畳んで食卓の隅に追いやつた。もう誰

からもかかるくることはないだろう。

『綾乃がお休み、だつてさ』

『ああ』

「えっ？ だつて、紺が……」

「病床のメイドがご主人様にぬくもりを求めてるだけですう」「んなもん求めるなあつ」

無意識のうちに恋人とより甘つたるいことをしている一人を引き離そうとするが。

「響子、怪我人なんだから優しくしてやれよ……」

「あーもうつ、光太も少しは気付きなさいよつ」

敵もある者、であろうか。それとも、これこそ運も実力のうちか。

紺は恥ずかしげもなく、光太の首にぶら下がつてゐる。

『大丈夫です。私が気付かせてあげます』

『ああ、そつちは気付かないでつ』

大騒ぎのベッドで、彼女たちの長い夜が始まつた。

愛は「わかつてくれた?」とウインクをして、ベッドサイドの丸椅子に腰掛ける。

視線の外れたこの機に、紬は強すぎた眼光を伏せた。

「幸運だった、と思います」

「そう?」

「はい。光太さんは、その、とても優しくしてくれました……」「別にお世辞はいいのよ、それとも……?」

「お世辞ではありません。私にチャンスもくれました」

「紬の回答に、愛は肩を落とす。

(紬はきっと、自分の失敗しか頭にないのね)

含みを持たせた言葉に気付かなかつたことに、その余裕のなさに、彼女は少し残念と思い。同時に紬の待遇は、もう心に決めていた。

「けれども、失敗した?」

「はい……。やはり、しばらくは戻れません。それに、アイアイの家族だとわかつては……」

「あなたの助けた子、それにあの子の両親は、きっと一生、あなたに感謝するわ」

「……でも」

「私たちの仕事は『運も実力のうち』よ。過程はどうあれ、あなたが人を幸せにしたことは明らかでしょ?」

「ありがとうございます……」

(やっぱり、まじめ過ぎちゃうかな)

愛は決心を変えることなく、腰を上げ、言い切る。

「とは言え、諸刃の剣なのが、紬ちゃんのいけないところよねえ」

「……済みません」

「あのねえ、何が悪いかわかつて謝つてるんでしようね?」「はい、それは、二人の一日を、こんなことに……」「違うわ。あなたの介入で、響子ちゃんを悲しませるかも知れないことよ」

にやりと、いつも以上にわかりやすい含み笑いを近づけて、紬の頭を優しく撫でた。

「えつ?」

「それ以上は、自分で考えなさい。さつきも言つたけど、しばらく一緒に暮らしていくから」

「それって……」

「紬ちゃんは小さいうちから仕事ばかりだったから、ね。この辺で恋でも、経験したら?」

「こ、恋つて、そんな、紬がご主人様にいつ?」

紬が真っ赤に染まつたときには、もう、愛は廊下の方へと歩き出していた。

「あらあら、光太つたら、そーゆーのが好きなの? 変態さん、隠れてないで出てきなさい」

「……気付いてたのかあ」

廊下からひょこっと顔を出した光太と響子を、同じように撫でる。

「当然。じゃあ私は仕事に戻るから。響子ちゃん、がんばってね」

「あ、はいっ!」

誰よりも悪戯っぽい笑顔で、去つていった。

彼女の言葉を、少なくとも響子だけは、よく理解していた。だから早速。

「さてと、つて、こらそこおつ! なんで手を繋いでるのよつ」

幸せの余韻が残つた表情で伝えてくれる。それを受け取つて、シチューの最後の一一口を飲み込んだ。

「ごちそうさま!」

食器を流しに置きに行こうと立ち上がるが、美紀が自分の分の皿を取つて言つた。

「洗つとくから先に風呂入つて来いよ」

「いや、自分でやるからいい」

「いいから。それぐらいオレにも手伝わせろ」

返事を聞かずにさっさと流しに食器を運んでしまった美紀の背中に礼を言つて、先に入浴を済ませてしまつことにした。

「そうだ、鍋はまだ洗うな。まだ少し残つてるから明日食べよう

「おう。食パンあるか?」

「確かにあつたはずだ。左の棚の下の方にないか?」

「んー……ああ、あつたあつた。あと三枚残つてる」

パジャマを持って美紀のそばを通り過ぎる。腕まくりをして流しに向かう彼女の姿に、ふと不埒な想像をしてしまつた。

「ん?」

「いや、なんでもない」

雅と入れ替わりに浴室に入った美紀は、あつという間に戻つてきた。Tシャツにジャージ姿の彼女は、雅が用意していた紅茶とお茶請けを興味津々でのぞき込んできた。

「お前そつちのクッキー持つて、ドア開けてくれ」

「あいよ」

美紀はクッキーの入つた皿を持って、寝室のドアを開けてくれた。そのまま先に入って、小さなテーブルを部屋の隅から持つて

きて、片手で脚を引き出して、部屋の真ん中に置いた。そこに紅茶を載せると、美紀もクッキーの皿を隣に置いて、ドアを閉めた。暖房は入れておいたから、寒さは感じない。

美紀は入り浸るようになつてから持ち込んだビーズクッショングを定位位置に並べてそこに腰を下ろす。ベッドに背中を預けてうーんと伸びをした。その左隣に雅も自分の座布団を置いて腰を下ろす。

「はい」

「お、サンキュー」  
揃つて紅茶を一口。

「明日の話だけど、別にお前まで五時に付き合わなくともいいんだぞ?」

「何、そう言っておけば夕方には用事が済むように動けるだろう。気が向いたら明日その場で綾乃を誘えばいい」

クッキーに手を伸ばす。一口かじつてから、思い出したように付け加えた。

「それに久し振りに挨拶に行くのも悪くないだろう。この間の学祭ライブ以来だから、もう三ヶ月近く会つてないしな」

「冬場は大学の方が忙しいとかでライブしばらくなかったら。三月末にどつかでやるつていつてたけど」

「大学生は大変だな」

「どーだか。どうせサボりまくつたツケだろ。オレらの方がよっぽど大変だよ。期末もあるし」

美紀はぱつぱつ切り捨てた。こうも遠慮がないのは、話題に出た美紀のバンドのリーダーが美紀の兄だからだ。

そのバンド「カルマ式」は、美紀の兄の井上浩太がリーダーを

務め、美紀はベースを担当している。他にギターとドラムを加えた四人編成で、美紀を除く全員が大学一年生だ。コピーやロック・アレンジがメインで、時々ライブハウスで演奏している。

雅はライブには毎回のように顔を出しているし、そもそも浩太とは中学生の頃からの知り合いだから、二人としゃべっているうちに他の二人とも仲良くなつた。

「三月末か。四人の演奏を聴くのは少し先になるな」

雅は何気なくそう言ったのだが、不意に美紀が顔を曇らせた。

「……どうした」

つい今し方までの表情との落差に、雅は戸惑つた。雅の視線に、

美紀は少し逡巡してから説明した。

「いや、兄貴がさ。カルマ式のメンバー増やすとか言い出して」

「ほう」

意外な言葉に、雅は目を丸くした。これまで二年近く聴いてい

るが、いろいろな曲をギター一本とドラム以外の三人のボーカル

とで演奏してきた。音楽は素人の雅には、これ以上のメンバーが

必要だとは思えなかつた。だが、浩太は五人目を入れると言う。

「ボーカルを入れるのか？」

「いや、キーボード。別のバンドでも弾いてる人で、実際すげー

巧いんだけどさ」

「納得いかないのか」

美紀は小さく頷いた。

美紀がカルマ式というバンドを大切に思つてることは、バンドに入る前から美紀と一緒にいた雅にはよくわかっている。美紀

と話をしていく、バンドの話が出ないことはほとんどない。ベー

スは楽だと思つてゐる、とかあんなの弾けるか、とか愚痴も多いが、

もう限界だから。

トンとベッドを滑り降りて、病室を出て行こうとしたとき。

「なんだ、元気そうじゃない？」

光太とともに入つてきたのは、長身の女性。

よく知つた声に、一人とも、驚きながらも会釈した。

しかしその光景を目の当たりにした、光太の方は驚かざるを得なかつた。

「えつ？ 母さん、紬……じやなくて、風間先生のこと知つてるの……？」

「ええ、よく知つてるわ」

それを聞いて、光太と同様に響子も驚き。

「紬と幸子おばさんって知り合いなの？」

「ふええ？ 「母さん」つてえ、えつ？ アイアイ、ご主

人様のお母さん？」

さらには、紬も驚いていた。

「ふうん、ご主人様、ねえ」

「あ、そ、それはこっちの話……」

ついつい出てしまつた昨日からの口癖を言い訳しながらも、目

はまん丸のまま。三人の中でも特に、紬は泡を吹いたようだつた。

そんなこともお構いなく、むしろ、そうなることを予見してい

たかのよう平然と、突然の訪問者は話を続けている。

「あとで聞かせてもららうからね。あ、そうそう、相沢は旧姓。今は松田愛なの。あだ名はアイアイのまま残つちやつたけどね」

「……二人つて、どういう関係なんですか？」

「今は秘密」

避けたい質問にも愛は動じることがない。

本氣で嫌がつてゐるよう見えたことはない。

自分の兄がリーダーで、自分以外全員が年上、という構成であれば、そもそも入ることもためらいなものだが、美紀は自分より三歳年上のメンバーと仲良く、また対等にやつてきた。

確かに巧いし、コピーとかアレンジとかしやすくなるけどさ。

いくつても何とかなつてたし、何とかするだろ」

拗ねた口調で言つた。唇を尖らせたその様子はいつもの男っぽい言動とはまったく違つて、まるで子供だ。雅は思わず抱きしめたい衝動に駆られ、ぐっと我慢した。代わりに右手で柔らかく頭を撫でてやる。

「もう会ったのか？」

「会つたっつーか、その人のバンドのライブ聴きに行つたんだよ、先週。終わつてから兄貴とか金やんとしゃべつてたけど、まあフツーにいい人っぽかった」

雅の手を振り払おうとはせず、そのままの口調で答えた。

「他の二人はなんて？」

「金やんは賛成、寛美さんは保留」

「寛美さんがすぐに賛成しなかつたのか。てっきり逆だと思つてたが」

雅は理由を想像してみた。

ギタリストの寛美は浩太の恋人で、うらやましい通り越して少々呆れるくらい仲がいい。特に理由もなく反対するようなことはなさそうだ。あるいは寛美はギタリストだから、自分一人でいのに、と思ってのことかもしれない。ただ、それを言うなら寛美や美紀が歌う時は浩太もギターを弾くのだから、その代わりだと思えばそれほど反対しなさそうに思える。

すると案の定、光太は落ち着いて、冷たい言葉を返してきた。

「……冗談も過ぎると可愛くないぞ」

「ふふつ、いいよ？ 今日ぐらいは貸してあげる」

目を瞑っているけれども、ベッドサイドの様子は手に取るようわかる。

響子の言葉に、光太は慌てて言い返すだろう。

「おい響子、何だよそれ」

「メイドは大切にしないとねえ？」

「知るか？ ちょっと出てくる」

彼の足音が遠ざかつていくのを確認しながら、紬は目を開けた。

「ふふーん、照れちやつて。行つてらっしゃい！」

足早に病室を出て行く彼を見送り、響子が再び、ベッドの方を向くと。

視線を合わせた紬が、言う。

「……響子ちゃんつて、呼んでいいかな？」

「んー、響子、でいいですよ」

能う限り、けれども自然な範囲で、彼女は明るく振る舞つた。

紬の表情が、それを求めていたから。

「……響子、ごめんね」

「なんで謝るんですか？」

感覚が告げた通りに暗い話題になりそうだったけれども、紬はまだ、穏やかな笑顔だ。

「だつて、大切なデート、台無しにしちゃつたから……」

「そんなことありませんよ」

「ううん、いいの。失敗は、失敗だから……」

「……課題、つてヤツですか？」

「……気付いてたんだ」

「はい、何となく。光太は気付いてなかつたみたいだけど。あ、でもだからって、話に乗つたわけじやありませんよ。観覧車でキスするのは憧れでしたし、できましたし。全然、台無しなんてことなかつたです」

どこまでわかつて慰めてくれるんだろうと、涙を止めるのが精一杯の紬に対して。

響子は踏み込むたびに、無意識の笑顔を増していく。

「でも、本当なら、今頃……」

「そうですね」

「……ごめん」

涙が混じる彼女の声に、上機嫌な声が被さる。

「今頃、一緒にご飯食べて、今日は紬と、お風呂入ろうかなつて、思つてました」

「えつ……？」

ポフッとベッドの端に腰掛けた響子は、足をパタパタさせて、虚空を見つめて。

「まだ、時間かかると思ひます。今までも長かつたんです。光太も私も、案外ロマンチック重視ですから。それとも臆病、なのかな」

「……ありがと…………」

「何泣いてるんですか。やりたい盛りにお預けつてひどいですよね、ぐらい言つておけば、気が楽になります？」

「うん……。ありがとうね……」

あまりに嬉しそうに紬が泣くものだから、響子までもらい泣きしそうになる。

顔がわざかにに向いているから、まだ、涙はこぼれない。でも

のが綾乃だけだったのだが、美紀も雅も、フレンドリーでおしゃべりな彼女とすぐに仲良くなつた。

元々の三人で何かを作つていたわけではないが、佳奈が輪に加わる前と後とで空気が変わつたのは間違ひない。それでも美紀は大した抵抗もせずにその変化を受け入れられた。

少なくとも音楽のことが絡まなければ、同じことははずだ。

「お前はその人自体ダメなのか」

「いや、その人だからつーわけじゃないんだけど」

「バンド云々がなくてただ金田さんの彼女というだけなら、仲良くなできそうか」

「たぶんな」

断定はしないが、ほとんど考えずに頷いたことを考へると、少し話した限りではその人には好感を持つているのだろう。単にバンドのメンバー構成が変わって、音なり空気なりが変わるのが嫌なのだ。

「それなら、バンドの中でもうまくやれるんじゃないか？」

「单におしゃべりするだけならどうぞけどさ」

「……お前は本当にかわいいな」

思わず本音が口をついて出た。美紀は雅をじろっと睨みつけた。

「女々しいって言いたいのかよ」

「そうじゃない。言葉どおりの意味だ。気にするな」

また手を動かし始めるとき、視線は多少緩んだ。短い髪を梳きながら、少し言葉を選んで口にした。

「音楽的にどうなるかはもう浩太さんが考へてるだろう。最初は試運転だろうし」

「だろうな」

ふと思いついたのは、自分たちのことだ。美紀が綾乃と仲良くなつすぐの頃、雅も含めた三人でずっと一緒にいる時期があつた。その三人の中に後から入ってきたのが、明日選ぶプレゼントントを贈る相手、佳奈だ。その時は佳奈と多少でも話したことがある

「それなら、その人が入って音が変わるのは、浩太さんの狙いどおりだろう。私にわかることじゃないかもしれないが、お前にならわかるんじゃないのか？」

今度は返事がなかった。頷きたくないだけだ。雅はなんとなくそう思った。

「お前がその人と人間的に合わないならまた別だが、そうじゃなければ、まずは受け入れてみたらいいんじゃないか？」それでやっぱりダメだと思ったんなら、そう言えばいい」

「ん！」

美紀はやはりすぐには頷かなかつた。雅の手のひらの感触を味わうように目を閉じた。

「それしかないよなあ」

そう呟いたのは、しばらく経つてからだ。

「とりあえず五人でやってみて、やりづらかったら兄貴に文句言う」

そう宣言して顔を上げると、すっかり冷めてしまつた紅茶を一息に飲み干した。ふう、と息を吐いた美紀は、幾分すっきりした顔をしていた。

「ありがとな、雅」

「どういたしまして」

雅も紅茶を飲み干して、お代わりを入れるために、ポットを手に立ち上がつた。

時計の針がこちこちと音を立てる。ベッドのすぐ下に敷いた布団からは、美紀の寝息が聞こえてくる。その他にはほとんど音がない。そんな静けさの中ですっと目を閉じているのだが、いつ

もより遅くまで起きていたのに、眠気が来ない。時折寝返りを打ちながら、美紀の寝息を聞いていた。

ふと美紀の寝息が止まり、むくりと起き上がる気配がした。そのまま部屋を出て行く。面倒なのか音が出ないよう気遣つて、雅はドアは閉めないまま。遠くからドアの閉まる音がして、雅はほっと息を吐いた。思わず息を詰めていた自分に苦笑して、時計を見る。午前三時を過ぎたところだ。

しばらくしてトイレの水を流す音がして、美紀が部屋に戻ってきた。雅は気付かれないよう、また目を閉じた。起こしたと思われてはいけない。

美紀は布団のそばに歩いてくると、やや間があつて、ベッドに手をついて、そのまま腰を下ろしたようだつた。おそらくは、雅の寝顔をのぞき込むような姿勢。

そのまま時間が過ぎる。布団に戻るでもなく、ベッドにそのまま寝転がるでもなく。目を閉じていては状況がまるでわからない。なかなか難しいとは思うが、もし手をついて座つたまま寝てしまつたのならちゃんと寝かせてやらないと、起きる頃には体の節々が痛いに違いない。

自分にそう言い訳をして、雅はそつと目を開けた。

翌朝。雅は美紀が起きるよりも早く目を覚ますと、顔を洗つて朝食の準備を始めた。と言つてもシチュエーの残りがあるから、鍋を火にかけてトーストの準備をするだけだ。ついでに、昨日美紀に買わせたバナナを切つて、ヨーグルトを入れた深皿に半分ずつ入れた。美紀は真夏だろうが真冬だろうが朝は冷たい飲み物を口にする。雅は特に決めているわけではないから、美紀と同じもの

#### 4 彼女だつて女の子

「ドジなメイドでごめんね」

少し長かつた検査も終わり、紬は今、二人の目の前に笑顔でいる。

「びっくりしたよお、どこも悪くないって？」

「うん、大丈夫だろうつて。でも、今日一日は安静だけどね」

特に症状はなくとも、頭を打つたのだ。医者にはベッドの上で

おとなしくしていると言われている。

「子どもを、助けたんだつて？」

「そうなの。二人を乗せたあと、乗り場から落ちる子どもを見つけちゃつて。つい受け止めに走つちやつた。この身体じゃ無理なのにね」

自嘲気味の笑いには、安堵が混じつていて。

「少しば自分を大切にしろよ」

彼女はきつと、子どもが助かつてよかつたとだけ思つてているのだろう。

それは決して悪いことではないが、彼女を心配する理由でもあつた。

「そうだね。ずぶ濡れで私を助けてくれた人も、風邪引かないよう気を付けてよ？」

「はいはい。冗談言えるなんなら、もう大丈夫だな」

「そりやもう。でも私は怪我人だから、王子様のキスとか、必

要かなあ？」

紬は頬を小さく上げる。

「おい、その子の家族だつてよ、通してやれ」  
「ありがとうございます。通してくださいー」  
「あー待つて、一緒に乗せてあげてー」  
集まる人をかき分け、通り道を作つてもらい、ついには紬の元に到達すると。

「済みません、私たち、その子の家族なんです。乗せてください」「わかりました。どうぞ」

制服姿の男性に許可を取ると、響子は身軽に、救急車の中へと乗り込んだ。

「光太、手出して」

「あ、ああ」

息を切らしながら追いついてきた光太が引っ張り上げられた直後。

後部ハッチは閉じられ、「シートベルトしてください」という

救急隊員の声とともに、サイレンを鳴らして車は走り出した。

「あの、済みません……」

同乗したはいいものの、状況のわかつていな響子たちが恐る恐る隊員に声をかけたとき。

「あ……きょう……い……の……？」

「大丈夫ですよ。ご家族の方が来てくださつてます」

か細いながらも聞こえた紬の声に、とにかく、無事なんだなど一人は胸を撫で押した。

「もう、心配したよ……」

「はあ、よかつた……」

彼の胸にむにゅっと、慣れないけどわかりやすい感覚が生ずる。

「つ、それ、は、さ……」

「あのー。なんかエッチなこと考えてるみたいだけどつ。そうじやなくて、紬だよ?」

あまりに予想通りの反応に笑うのを堪えながら、彼女はひょいと問合ひを取つた。

「あ、ああ、紬な。……どうするんだ? 聞いてみないことには……」

「いいよ、泊めてあげて」

「でも……」

「気にしないで。紬、帰れないんでしょ? なら、泊めてあげなよ」

「いいのか?」

響子をそっさせるに十分な表情だつた。

「何を今更……。あつ、隣でエッチなことしちゃうつてのもいいかも?」

彼女はついに、思いつきり抱きついて。

「うあつ、何してんだよつ」

「えー、光太は私と、したくないの?」

「まあ、その……」

「なんてね。いいよ、別に。急がなくつて。……男の子は、そうもいかないのかな?」

「そ、そ、うだな……」

——ちゅ

「なあつ!」

「素直な子にはご褒美! ……大丈夫、嫌とか怖いとかじゃない

から。ただ、今は、他に大切なことがあるだけ。そうでしょ?」「……こうもうまく恩を売られちゃ、追い出せないしな」

「だよねえ。お子様の皮を被つた何とやら、だよ。さ、降りよ」

「ああ、迎えに行くか」

ゴンドラのドアが開く。

二人は繋いだ手をそのままに、紬を捲しに歩き出した。

「どこ行つたんだ?」

「すぐ見つかるかと思つたんだけど。電話してみるね」

しばらくしても響子は携帯電話を耳に当てたまま、ふるふると首を振つてゐる。

どうやら、電話に出ないらしい。

「つたく、迷子じやないだらうな?」

光太は腕口を叩きながらも、響子の举动を見張つてゐると、その向こうに、見慣れぬ状況があつた。

「響子、あれ……」

「ん? 何?」

電話機をそのままに、光太が指差した方を見ると。

人混みの中にできた人集り、その向こうに見える紬らしき存在。

あろう事か、ストレッチャーに乗せられ運ばれてゐるではないか。

「何ぼさつとしてんのよつ、行くわよつ」

響子は一目散に走り出す。

光太はワンテンポ遅れながら彼女の後を追つた。

「すみませーん、どいてください。その子の家族ですー」

でいい。オレンジジュースがあつたから、二人分コップに空けた。

食卓の上は片付いたので、新聞を取ってきて食卓に放り投げて

から美紀の様子を見に行く。美紀は目を薄く開いて、ベッドに寝転がつたままぼーっとしていた。ドアの音に気付いて、入ってきました雅に視線を向ける。

「おはよう」

「おはよ……あふ。あれ、オレなんべッドの上にいるんだ?」

眠そうに身を起こして、ようやく気付いたようだった。当惑顔

の美紀を見ていた雅は、ふとした衝動の指示示すとおりに美紀の隣に腰を下ろして、彼女をふわりと抱きしめた。美紀はあつさり

と雅の腕の中に收まり、自分も雅の背中に腕を回した。

「……どうしたよ、急に」

「お前、昨日のことは覚えてないんだな」

「昨日のことって?」

「なんでベッドで寝てるのか、だ」

「いや、全然……」

狐につままれたような顔の美紀の頬に自分の頬を当てた。抱きしめるくらいならまだしも、雅がこんなにあからさまに甘やかな仕草をしたことは、美紀の記憶にはない。美紀はいよいよ困惑した。

「何があったんだ?」

「ん?」

「昨日の晩。オレ覚えてないんだけど、お前は覚えてるんだろ?」

「もちろんんだ」

「教える」

「自分で思い出せ」

「無茶言うなよ」

「私から言わせるな、そんなこと」

「いや、言えって」

「朝食の支度はもうできてる。顔を洗つてこい」

耳元でそうささやいて、ぱつと身を離した。そのまま立ち去る

ときには、ぱつとベッドから起き上がって首にも腕が巻き付く。抱きついているのではなく捕まえにかかっているのは、入つていれる力でわかる。雅は肩と腰をがっちり固められたまま、平然と尋ねた。

「どうした」

「どうしたもこうしたも……」

「覚えてないのなら気にすることはないだろう」

「お前の態度が気になるんだよ。なんでそんなに……?」

「そんなに……?」

言いよどむ姿もかわいらしい。雅は美紀のそんな姿も好きなのだ。教室で見せるがさつで開けっぴろげな表情も、時折見せる真剣そのものの横顔も、ステージ上で見せる上気した笑顔も、雅に甘えたりからかわれたりする時のふくれつ面も。

「私がお前に甘えるのは不自然か?」

「嫌じゃねーけど、急にどうしたんだろうって思うだろ」

「ふふふ」「だからなんだその意味ありげな笑いはっ！」

「だから意味はないと言つてるだろ？ 単にお前の反応が面白いだけだ」

「くあーっ！」

こんなに頬が緩むのは久し振りだ。結局美紀は雅に半ば引きずられるようにして洗面所に連れて行かれた。不承不承顔を洗つて歯を磨く間に、トースターのスイッチを入れてシチューをよそつた。トーストが焼ける前に現れた不満げな美紀を椅子に座らせて、雅は後ろから耳元にささやいた。

「昨日はお前が寝ぼけてベッドに入ってきたんだ。自分の部屋と勘違いしたんじゃないかな？」

「……そんだけか？」

「一晩中しがみついておいてそれだけはないだろ。おかげで寝不足だ」

「あー……それは悪かったよ」

「ついては食べてから少し寝るから、出かける時間になつたら起こしてくれ。十一時だつたよな？」

雅はそう言つて身を離すと、二人分のトーストを取りに行つた。

「ああ。それくらいは構わねーけど……」

トーストとシチューアップを並べて置いて、隣の椅子に雅も腰を下ろした。

「なーんか隠されてる気がする」

「だとしても寝ている間のことだ。そもそも私しかいないんだし」「だからそういうことをだな——」

突然のことにキヨトンとしている響子を背にして、小さく手を振りながら。

紬は観覧車乗り場へと続く階段を、一人、降りていった。

「お幸せに。なんて、言い訳つぽいかな？」

独りごちて見上げたイルミネーションが、わずかに滲んで見えた。

「なんか紬に悪いことしちゃつたよね……」

「二人きりなんて、今更なんだけどな」

(……これだから私が苦労するのよ)

内心溜息をついた響子だが、そんな後ろ向きなことは言つてられない。

紬が気を遣つてくれていることには気付いていた。だからと言えわけではないが、彼女の気遣いを理由に勢いが付くなら、それでもいい。

「ねえ、隣座つてもいい？」

「ああ、好きにしろ」

「ありがと。……つと

ゴンドラの中で席を移ると、響子はくてつと、身体を右に倒した。

「一度聞きたかったんだけどさ」

「何？」

頭上の声に、響子は答える。

「こういうの、好きなの？」

「それもあるけど……」

「そんなに気になるなら、私が寝ている間に仕返しの一つもすればいい」

雅がやりと笑つてそう提案すると、美紀はぴたりと口を閉ざした。

光太は左肩の重さを氣にして、車窓の外に投げ出した視線を動かせないでいる。

「……こうやって、くつついたりすること？」

照れていることなどとつくにお見通し。わざとらしく問い合わせながら、両手で彼に触れた。

「ああ。……こういうの、嫌いなのかと思つてた」

「好きだよ。年中べたべたしたいとは思わないけどさ、手を繋い

だり、肩を寄せたり、……キスしたり、したいって思う」

「そつか。なら、これからはそうするから」

「うん。……変に優しいんだよね、光太は。でも好きだよ、そー

ゆーの」

——ちゅ

「うわっ、な、何をつ」

「ふふーん、やつとこつち向いたーつ」

左頬を押さえながら響子に向けた笑顔は、夕日よりも真っ赤な色。

大慌ての光太から見える笑顔は、案外しれつとしていたりする。

「…………」

「照れない照れない。私たちは恋人同士なんだし？ キスの一つ

や二つ当たり前だよ？」

「そういう問題かよ……」

顔こそ向けたものの、目なんか当然合わせられず。

響子がどんな顔をしているのか、彼には見る余裕もなければ、考える余裕もないだろう。

「そういう問題。ところでさ、今夜はどうするの？」

光太の慌てぶりをいいことに、思いきつて胸を押し当てる。



頬を膨らませる彼女の瞳には、悪戯心が戻っている。  
それが悪戯で済まされるのか、考えていなかつたが。  
「……ふうん、いつの間に見たのかしらねえ?」  
「ち、違うつ、誤解だつ、あれはたまたま  
うろたえる光太をあつさりと許した響子を見ながら、紬はやつぱり笑顔。  
(ふふうん、今日は素敵な一日になりそう)  
笑顔の先にも、笑顔があつた。  
(たまたま見たのね? ……まあ、いいけど  
たまたま見たのね? ……まあ、いいけど  
特別扱い、嬉しかつたし……ね)

長く伸びた影を背に、紬は今も、光太の腕を抱いている。  
遊園地、みんなで来た方が楽しいね  
響子はとうに怒る気をなくしており、今や楽しげに彼女の隣を歩いていた。

「紬、よく来るの?」  
「うん、よく来るよ」  
光太を引っ張る彼女に、二人とも何となく違和感を感じていたが、これで納得。  
「へえ、意外のような、想像通りのような」  
「あー、それって子どもっぽいとか言いたいんでしょお?」  
「あたり」  
「うー」  
まだまだ多くの人がいる園内で、紬はどこかを目指している。  
最初のうちは「どこ行くの?」って聞いていたが、あまりに迷いなく引っ張つていくものだから、すぐにお任せ状態になつていい

「遊園地を引つ張る彼女に、二人とも何となく違和感を感じていたが、これで納得。  
「へえ、意外のような、想像通りのような」  
「あー、それって子どもっぽいとか言いたいんでしょお?」  
「あたり」  
「うー」  
まだまだ多くの人がいる園内で、紬はどこかを目指している。  
最初のうちは「どこ行くの?」って聞いていたが、あまりに迷いなく引っ張つていくものだから、すぐにお任せ状態になつていい

た。  
「先に言つちやうけど、いつもは一人で來てるの」「言わなくともいいのに……」  
察した響子は若干曇つたが、紬は相変わらずだ。  
「心配しそうだよお。紬の趣味だから、一人でも来たいの」「ああ、なるほど。一人で旅行みたいなもんだもんね」「そそう」  
響子と紬はまるで姉妹みたいだ。仲睦まじく腕を組んでいるはずの光太は、連れて歩かれている犬のよう。  
そう見えるにはやはり理由があるわけ。  
「どうか?俺には单なる寂しいおばさんとしか」「……ご主人様は、少し、素直すぎます、ねつ!」「痛つ、ちょ、腕つねるなあつ」「光太が悪い。反省なさい」「普通助けるところだろ。紬、痛い、痛いって」  
今日は一日中、こんな関係だつた。  
「遊園地にいるとみんな楽しそうで、見ていても楽しいんだよ?」「んー、私は『一人つて寂しい?』とか思つちやう」「そこは、考え方一つ、かな。ま、響子様にはご主人様がいるしね」「……そうだといんんですけど」「遊園地にいるとみんな楽しそうで、見ていても楽しいんだよ?」「そこは、考え方一つ、かな。ま、響子様にはご主人様がいるしね」「……そうだといんんですけど」「遊園地にいるとみんな楽しそうで、見ていても楽しいんだよ?」「ね? 私にはなかつたけど」「えつ? 紬つ」「いいのいいの、私は下で待つてるから」

紬は光太の腕を解放し、トンと、響子に押して渡した。  
「夕日の差す観覧車の中で……。憧れのシチュエーションだもんね? 私にはなかつたけど」「えつ? 紬つ」「いいのいいの、私は下で待つてるから」

足下には先ほどまで光太が寝ていた布団。もし彼がいたら、命は危なかったかも知れない。

「だ、だつて、今日、土曜ですよ？」

「だからだよう。これから遊園地行くんだからあ」

「はあ……」

くるつと振り向き今日の予定を訴える紬。一方、ベッドに取り残された響子は、理解も取り残され気味だったが。一拍置いて気付く。

「つてまさか、それ、光太とじやないですかね？」

「そだよ？ ご主人様と、響子様と、行くのー！」

「なんで先生が光太と……えっ？ 私も？」

まさかという疑いから、予期せぬ驚きに変わる響子の前で、紬はネグリジェの裾をひらひらさせて笑っている。

「うつ……、それは否定しませんけど……」

響子はベッドの上にぺたんと座つたまま、言いにくいことを隠せぬ表情で反応していた。

「観覧車でキスして、夜は初めての……なんて、ねえ？」

「ななな何を言つてるんですかつ。別にそんなこと考えてなんか」

「今時キスも、その先もまだ、なんてねえ。子どもじやないんだしねえ？」

「キスは昨日しましたよつ！ だいたい、先生だつて初めてつて言つてたじやないですか！」

「私はいいんだもーん」

悪戯っぽさ満点で転がり続けていた紬の声。

りた。

しかし突然、変調を來した。

「ご主人様を幸せにするのが、メイドの仕事だから……」「……先生？」

隙あらば言い返してやろうと思つていて響子が心配するほど

の、わかりやすい変化だつたはずだが。「ん？ あ、気にしないで。それに『先生』じゃなくて『紬』だよつ」

（確かに今、おかしかったよね……？）

——コンコン

響子が不思議に思つていると、思考を打ち切るように部屋をのぞみ、ドアが叩かれる。

「おはよ。ご飯、できるから」

返事をした紬が響子の方を向いたので、光太もつられて響子の方を向くと。

彼はすぐさま視線を外した。

「……響子、ボタン」

「えつ？ あつ、ごめんつ——」

彼の言葉の意味を、響子はすぐに理解した。  
派手に外れた、パジャマのボタン。曝された素肌。

慌てて前を合わせてなお、視線を外して頬を赤らめる一人。  
気まずい空気を読んで不満に思うものが一人。

「えー。ご主人様、紬のときと反応が違いますー。特別扱いよくないですかー」



「どうだったの？ 女の子一人と寝る、ピンク色の経験は？」

敵軍には幸子も加勢し、完敗。

「どうもこうもあるかよ」

「欲望を制するというのは、大変なことよねえ」

「あのなあ……」

結局、三人は狭いからと同衾にならなかつたのは幸いだつたが。彼の一晩は、最悪の血色に現れていた。

「ところで、あの二人は？」

「……よく寝てる」

「へえ。響子ちゃんはともかく、紬さんも大したものね」

感心した風な口調だが、箸を全く止めないところを見るに、想定通りなのかも知れない。

しかし光太はそこまで察せず、ありがちな「もしも」を口にする。

「俺が変な気起こしたらどうするつもりだつたんだよ？」

「響子ちゃんはそれを見むでしよう？」 紬さんも案外、ねえ？

（はあ。姉さん、頭の中がちょっとおかしいからなあ）

聞くだけ無駄だつたなと光太は心中で溜息をつき、辟易とした。

「うあつ。ちよと、せんせ、なんで抱きついてるんですか？」

それはもうしつかりと、紬が響子に、横からしがみついていた。

「ふやあう、もう少し寝かせてですよお！」

（はあ。もう、寝ぼけないでください）

「んあ？ あ……、林さん、おはよ……」

彼女は目を半分開くと、声のする方を見て眠たい反応をする。

そしてまた目を閉じて、可愛い寝息を……という状況にもう一喝。

「だーかーらー、その手、離してくださいよー」

「んー？ あ、ごめん……。ふみやう、今、何時い？」

「九時十分ですよ」

それでもまだ目覚めきらない眼で問う紬に、響子はどうと言うこともなく答えると。

「……えーっ！」

いきなりアクセル全開の鋭い声が飛んできた。

「なつ、ちょちょと、いきなり大きい声で何ですか？」

「なんで早く起こしてくれなかつたの！」

どうやら予定外に寝坊したらしい。

彼女は驚く響子など氣にもせず、ひよいつとベッドから飛び降



一方、お寝坊さんの二人も目を覚まし始めていた。

「ふあーあ、あ、もうこんな時間……」

枕元の携帯をひつたくり、響子は時間を確認した。もう九時を過ぎている。

「もう起きなくちゃ……ん？」

ゆっくり上体を起こそうとするも、なぜか、持ち上がりない。

視線を横に向けると――

「うあつ。ちよと、せんせ、なんで抱きついてるんですか？」

それはもうしつかりと、紬が響子に、横からしがみついていた。

「はあ。もう少し寝かせてですよお！」

（はあ。もう、寝ぼけないでください）

「んあ？ あ……、林さん、おはよ……」

一方、お寝坊さんの二人も目を覚まし始めていた。

「ふあーあ、あ、もうこんな時間……」

枕元の携帯をひつたくり、響子は時間を確認した。もう九時を過ぎている。

「もう起きなくちゃ……ん？」

ゆっくり上体を起こそうとするも、なぜか、持ち上がりない。

視線を横に向けると――

「うあつ。ちよと、せんせ、なんで抱きついてるんですか？」

それはもうしつかりと、紬が響子に、横からしがみついていた。

「はあ。もう少し寝かせてですよお！」

（はあ。もう、寝ぼけないでください）

「んあ？ あ……、林さん、おはよ……」



現実に対応しきれなかつた。

しかし彼女は一枚上手で、そんな彼を予想していたのかも知れない。冷ややかに言い返すようなこともなく、あっさりと先導した。

「ええ。さつきのことだつて事故だつたんじよ?」

「あ、ああ、事故、事故だつた」

「事故を責めるほど、子どもじやないわ。でも、二つ、条件がある。聞いてくれる?」

「わかつた。条件つて何だ?」

彼女の敷いたレールにも気付かず、光太はスポーツと戻にかかつた。

にやり。そんな音が聞こえてきそうな不敵な笑みで、響子は言ひ放つ。

「二つは、今ここで、私にキスなさい」

「きよ、響子、お前何を……。先生見てるんだぞ?」

落ち着いた口調だつたが、少なくとも光太にとつて、とんでもない話だつた。当然の驚きを見せたつもりの光太だつたが、この場ではまるで異端のよう。

「だからどうかしたの?」

響子は努めて、無事を装つてゐるのだろうか。

（そんなはずない……）

「そうだよお。私は先生じゃなくて、メイドなんだからあ。あ、これからは『紺』つて呼び捨てにしてよねつ」

紺は努めて、脳天氣を装つてゐるのだろうか。

（いくら何でも、先生もわかつてるだろ……）

二人とも、心中は穏やかでも、晴れやかでもない。そのはずな

## 珠坂の女神

川鶴鶴肋

4／2 月曜日

ポケットの財布と文庫本を何冊かおさめたリュックだけを荷物に、浮きまくつたデザインの無駄に大きい駅ビルを出て。「変わらないね、ここは」

そんなことを言ってみた。

お約束もお約束の台詞。

十年を経過した今でもこのカラッとした大気の肌触りははつきりと覚えている。

が、この地にまつわる忌まわしい記憶が、心地よかつたはずの涼風をねつとりとしたものへと変えていこうとする。

だからもう一つお約束。

「珠坂よ、私は帰ってきた!」

ぐつと拳に力をこめて叫んでみる。

「よおしつ……はあ」

が、すぐにため息にかわつた。

氣を抜けばたちまち脳内を埋め尽くすあの光景。増殖するウイルスのように思考へとまとわりつき、妨害し、停止させようとする。

思考の泥沼は浮力に乏しい。多少気合いで入れてみたところで、気分は浮かび上がらない。

でも立ち止まつれば、それこそずぶずぶと沈み込む一方。動かなければ動けなくなる。

のに、現実は淡々と続いた。

「とにかく、私は、今、キスして欲しいの」

「いや、でも、はじ——」

「いいから。何も言わずに、キスしなさい」

切り札とも言うべき制止は振り切られ、光太にはあとがなくなつた。

（俺だつて、別に、嫌なわけじやないけど……）

糢然としない思いを抱いたまま、彼は、一步二歩と歩み寄り、わずかに身を屈める。

——つ……

顔を離し。目を開け、笑顔を覗認する前に。

彼女の声が、聞こえる。

「んー、なんか気持ちが入つてないけど、ま、いつか。変に気持ち入れられても、らしくないしね」

キスのあと、彼を前に照れている。そんな状況であれば光太の科白も変わつたろうが、幸か不幸か、今はそんな状況はない。

「ひどい言われようだな……」

光太が肩を落とす中、響子は待つことなく次の条件を提示した。

「さて、もう一つだけ。私もここで暮らすから」

刹那、光太はまた、頭を抱える羽目になる。

「……はあ? 何だつて?」

彼の聞き返した意味を、頭痛を、彼女は理解していないらしいが。

「聞こえなかつたの? 今日から私も、ここで暮らすつて言つてるの」

「い、いや、そこもそうだけど。私『も』つて……?」

動け、動け。  
動け! 動け! 動け!

勢いをつけて辺りを見渡す。

案内板の類はない。

交番もない。

人通りもいかにも少ない。人の出入りの少ない珠坂市の中心は駅前ではないのだ。

そしてこの場所にして携帯圈外。場所がダメかキャリアがダメか。

まいつた。

かつて知つたる土地というのにこの不安感。

どこを見ても知らない人々。

やっぱ。また沈む。

あー、ここなら一・三年は停滞とかいうやつ出来ちゃいそくな気もする。

「ナナちゃん?」  
「うわ!」

背後からの声に反射的に振り向き、当然のようにバランスを崩した。

ここは結構急角度の階段。しかもデザイン優先で滑りやすい御影石製。段差も大きく、どうなつてのバリアフリー。いやむしろバリアフル状態。

お父さんお母さん先立つ不幸を以下略。

「よつ」  
のびてきた手に腕をつかまれたおかげで、爪先との絶妙な三点

バランスで静止。

「ナナちゃんでしょ？」

たすけてくれた栗色ロングヘアのえらい綺麗なお嬢さん（思いつきり元凶でもある）は、お日様のような満面の笑みを浮かべ、そう言つた。

「そうです七夏です五ヶ瀬七夏ですその通りです認めます」

半ばヤケでまくし立てる。

何が何だかわからんが、救いの手を握る事に成功した途端、顔まで漬かっていた沼地から一気に空中へと引き抜かれたような気分。

「やっぱりナナちゃんなんだね。面影あるもん。すぐに分かったよ」

しかし、状況の理解が進むにつれ、とびっきりの美少女に微笑まれているにもかかわらず背筋が凍るような恐怖心が沸き上がつてくる。

「どうか明らかに物理的な危険を感じていますよ。」

「認めます、認めますから。どなたか存じませんが早く降ろしてください。いやむしろ怖いですこれ。せめて半端な怪我は勘弁。ダメならダメでいいそひ思にお願いします」

ガテン系のごつついオッサンならここまで怖くないんだろうけど。いかにも華奢なお嬢さんに命を預けるのはちょっと。

「大丈夫、まかせて。私、結構力強いんだから」

この不安定な状況で会話を続けるんだから実にマイベースな人である。

たっぷり一分はバランス状態を保った後、ようやく解放された。

涙多めでキラキラした瞳が彼を捉える。

「別にそんなことは……」

つい逸らしてしまった彼の目は、どこを見るともなく泳いでいる。

「でね、その課題のために、メイドになろうって思ったの」

「なら、がんばれよ」

照れている自分自身に耐えられず、光太は再び、ベッドに倒れ込んだ。

「うん、でも、失敗しちゃったね」

紬はまだ、光太の顔があつた位置を見つめ、話し続けている。けれども見られなくなれば、知らず知らずに表情の影が濃くなってしまう。

「……響子のことなら、気にしなくていいから。俺の問題だし」

「ううん。そもそもうただけど、さつきの、その、キス、松田くんに幸せになつてもらおうつて、お嬢さんに教えてもらつたのに……。我なんかの、嫌だつたよね……」

「ちょ、ちょっと待て。嬢さんに教えてもらつたつて言つたよな？」

紬の科白に、光太は慌てて上体を起こし、勢いそのままに問う。紬としては予想外だったのだろう、目を見開きながら答えた。

「えつ？ あ、うん。優しく教えてくれたよつ」

再確認の間に、予想通りの答えが返ってきた。

「はあ、嬢さんか……。何考えてんだよ……」

ついつい顔を擡めながら、溜息を吐くことが止められない。

目を伏せる彼を見て、一方の紬は、どうしたものかとうるたえ始めた。

（えと、あの……。紬、いけないこと言つちゃつた？）

「覚えてない？」遠野結香です。さおりさんの代理の篤史ちゃんのさらに代理で来たんだけど」

ちょい待ち。

整理しよう。

サオリさんってのは、海外の学校に通っていたが珠坂で就職した、新川分家のさおり姉さんだろう。アツシちゃんってのは新川本家の篤史兄さんか。

その使いを名乗るという事は、この結香さんという人も関係者なのだろう。

とすれば、この人とも会つても良さそうなもの。

綺麗な人だがいやに親しみやすい、いわゆる癒し系。多分に天然ボケが入っている氣もあり。こんな人物はとんと記憶にない。

しかし、さすがに十年も経てば容姿も変わる。現に彼女は七夏の事を知っていたのだし。

あの頃の七夏はほんの子供だった。全てを覚えているとは限らない。

でもアレだけは忘れられない。いや、忘れてはいけない。

「ナナちゃん？ どしたの？ 行くよー」

「あ、いえ。ちょっと考え事してました」

人の声があると、戻ってこられるのが早い。

でも、だからといって考えなくていいわけじゃない。それは七

夏が背負つていかなければならぬこと。その重みに耐えかねて底なし沼へと引き込まれようとも。

彼女の落ち着かない拳動に、彼も察したのだろう。

そもそも紬は悪くない。と言うか、この場で辛い遭遇を受けるべきではない。光太は矛先を向けまいと、努めて明るく。

「先生は全然悪くないから。メイド、続けてもいいぞ」

「いいのっ？」

「ああ、何だ、やりたいんだろう？」

「うんっ！」紬、メイドやりたいっ！ ありがとつ、ご主人様っ！」

「じゃあ、俺は響子に謝つて、いさせてもらえるよう頼んでくる」

自分の言葉一つで、目の前の人気が晴れやかな笑顔になる。

誰だつて嫌な気はしないだろう。もちろん光太も少し嬉しくな

り、足軽にベッドを降りようとした。

そのとき、部屋のドアが開いた。

「その必要はないわ」

「響子……」

戻ってきた彼女に対し、光太の心は反射的に、渋い反応を示す。見られたままを言えば、浮気の現場を押さえられたようなものだつた。大味な彼女とて、気にしないわけもなく、気にして欲しない。そんな気持ちは無意識のうちに、彼の拳動と思考を支配した。

しかし、現実は思考を越える。さつきも、今も。

「話は聞いたから。メイドでも何でも好きにしなさい」

「やたつ！ ありがと、林さん！」

「ごめんっ、あれは、その……て、えええっ！ いいの？」

光太に引き続き、響子にも許可をもらい、飛び跳ねて喜ぶ紬。

他方、光太は責められる想定のままに反応してしまい、意外な

「うう……。ごめんなさいですぅ。でもでもお……」

響子の冷え切った上から目線に、ここまでケロッとしていた紬が突然萎縮気味。発言からも、彼女らしい勢いが失われている。

もはや勝者がどちらかは明らか状況。だとしても、全力でつぶしに行くのが響子という少女らしい。

「だいたいなんですか、その格好。コスプレで教え子を誘惑ですか？」

淫乱教師とでも罵らんばかりに嫌味たっぷりのトーンで、響子は責める手を緩めない。

しかし、格好を責めたのは、誤りだったのかも知れない。紬も一生懸命に反論を始めた。

「ち、違うもんっ！ これは、メイド服です！ 紬はメイドなのです！ 松田くんがご主人様なのです！」

「はあ？ 何それ。ご主人様とメイドって、イメクラかつての。変態っ！」

「うーつ、変態じゃないもん！ イメクラじや……イメクラつて何？」

「え、えと、イメクラ、イメクラね。えーっと……」

喧嘩を始めるかと思えば、紬の疑問で勢いはポツキリ。

その上、吹つかれた響子の方が狼狽している。

（俺が悪いんだけど……、これで収まってくれれば……）

微妙な立場故どちらの味方もできない光太にも、案外早く事態の収束が見えてきた。

そのときだ。

「あらあら、響子ちゃんたら蒲魚ぶっちゃつて。仕方ありませんねえ、お姉さんが代わりに説明してあげましょう」

バーンと登場したのは事態の根源、幸子だった。

「響子ちゃん、ちょっと来てちょうだい」

引つかき回しに来たのかと思われた幸子だが、事情を説明したいからと、響子を連れて出て行ってしまった。

「いいよ、別に。過ぎたことだし」

ベッドの上で仰向けになる光太と。

「……ごめんね、キスは、よくなかつたよね」

絨毯の上にぺたんと座る紬と。

「あのね、松田くんにね、聞いて欲しいことがあるの」

「……何？」

「追い出されたって言つたじやない？ ……戻るには、ある『課題』をクリアしないといけないの」

「……課題、つて？」

「それはね、言えないんだけど……」

「そつか。できそなうなのか？」

変化した声音に光太は身体を起こしたが、彼女の表情は見えない。

けれども、次の瞬間に上げられた顔は、憂いを含みながらも笑顔だった。

「心配してくれるんだ？」

「まあ、な。すげー泣いてたし」

「ありがと。優しいね、松田くんは」

結香と名乗る少女は、フローライト・コーポなるけつたいたな名前のついた小綺麗なアパート（別に透明ではない）へと七夏を案内してくれた。

そのまま連れてこられた三号室のダイニングでは、

「悪かったなナナ。今日はどうしても手が離せない用事があつてな」

引き締まった長身・筋肉質の少年が、見覚えのある柄の家庭用ゲームチエーン店の袋を手にからから笑った。

全然変わらない。この脳天気な態度は篤史兄さんだ。

「篤史ちゃんに身体は一つしか無いから。そのため私がいるの」と、お茶を入れてくれる結香さんの健気な発言。きっとカノジヨなんだろう。

天然っぽいけど、明るくて優しくていい人だな。  
「ども」

上手いこと使われてる感がアリアリだけど。

「ナナは五号室使ってくれ。俺はこれから忙しいけど、荷物の搬入とかはきつとこいつら手伝うから」

女の子に力仕事か。

で、篤史兄さんはゲームやるんだろうな、きっと。

「いや、昔住んでた家に戻る予定なんんですけど。引っ越し屋が別便で荷物を……」

「あー、さおり姉の指図だから逆らうだけ無駄。あとたぶん御両親も周知」

のお姉さんって、今は斗流宗家代理なんだっけ。

ここだと学校から近くなるのは都合いいんだけど、一人でやつていける自信はないなあ。

篤史兄さんの衝撃発言はさらに続く。

「ちなみに、一号室はさおり姉と詩紀<sup>しこ</sup>、二号室はさおり姉の荷物置き場、六号室は陸奥十悟兄、七号室は七瀬姉妹、九号室は宮藤姉妹だ」

どくん。

耳から飛び込んできた単語をきっかけに、あの光景がフラッシュバックする。

「なな、せ？」

そんなことはあり得ない。

七瀬の双子がこんな所にいるはずがない。

「とっても可愛くなつたよ。撫菜ちゃんと鉢菜ちゃん」

あり得ないはずだ。

あの光景を見た者ならそう思つて当然だろう。

「誰か一緒に住んでるんですか？」

「いや、二人つきりだよ」

そんな。どうやって？

「さおり姉や俺たちと共同生活に近いけど。ここは事実上の学園寮だしな」

「うそだつ！」

強い口調に驚いたか、篤史兄さんが苦笑する。

「おいおいどこの童宮さんだ。ナナに嘘ついて俺に何の得があるよ」

「いや、そういう意味じゃないけど、でも」

本当なら、どんなに嬉しかることか。

そんな夢を何度見た事か。何度も目覚めてから泣いたとか。

そしてきつとまた。

「でも、そんな」

乱暴にドアを開く音が、空転する思考を遮つた。

「たつだいまあ！」

続いて、自己の存在を宣言するかのようなソプラノが高らかに響き渡つた。

何かに突き動かされるように玄関へと急ぐ。

買い物袋をさげた二人の姿。

紬がケロリと吐いた言葉に、部屋の空気は和ら……ぐはづもなく。

カノジョの圧政を強める結果となるだけだつた。

「光太っ！ ちょっとそこに座りなさい。先生も！」

そしてカノジョの前に、二人はおとなしく正座せざるを得なかつた。

（ヤバいなあ、あー、俺何やつてんだろ）

光太は絶望の淵にあるような、生氣の失われた顔をして。

「はーい」

紬はおそらく事態を理解できていないのだろう、相変わらずの笑顔で。

カノジョが話し出すの待つ。

そしてキツとした視線を光太に送りつつ、カノジョは切り出し。その話は、意外な、二人どちらにとつても意外な話だつた。

「モテない光太のことだから、迫られたら拒まないだろうとは思つてたわ。浮気つてほどでもなさそうだし、今回は特別、許したげる」

（助かつたあ。俺、もう絶対こんなことしないって誓う）

声にこそ出さぬが、表情どころか、身体全体の緊張が解け、光

太は明らかに安堵していた。

しかしその隣は、逆に身体に力が入り、膝をついたまま身を乗り出すほどだ。

「ええっ？ ねえ、ひょつとして、林さんって松田くんの彼女？」

（そうですよ。私、林響子は、そこの松田光太の彼女、恋人です。人の恋人に手を出さないでください。と言うか、その歳で高校生に手を出すつて犯罪じゃないんですか？）

「ただいま」

その片割れの口から、いかにもローテンションな声で先程と同じ台詞が紡ぎ出された。

一目で分かった。

でも直に見たところで信じられる光景じゃない。

記憶と現実との不整合に折り合いをつけるためにはある程度の時間が必要だった。

具体的にはただただ放心。

「おーい、ナナ？」

「大丈夫？」

篤史兄さんと結香さんの二人がかりで肩を揺すられ、ようやく我にかえることができた。

後から聞いたところによると、復活まで三分かかったそうな。なぜなら七夏の中では二人の時間はあの光景のまま止まつていったから。

だからきっと、夢の二人はいつも小さな少女のままだった。でも目の前に立つ少女達は、小さく華奢な方とはいえ中学三年という年齢相応の姿。

頭の両側でくくつた、色素の薄いふわふわの猫つ毛。

砂糖菓子のような、フランス人形のような、甘やかさと纖細さと愛らしさ。

子供では持ち合わせぬ華やかさを身につけた二人の姿は、七夏の貧弱な想像力などはるかに超えた現実感をもつて、これが眞実であると訴えかけてきていた。

「おー！ すぐくナナちゃんっぽい！ ナナちゃんでしょ？ ね？」

ね？

いつ)

彼は大慌てで目を見開き、彼女を制止しようとするも、遅かつた。

「まちゅー

——ちゅつ

瞬間、世界は静止した。

彼にとって目を開いたことは、不幸だったのかも知れない。

（俺、今、キスしてる、なんだよな……）

瞳を閉じた、見慣れた顔が、ゼロ距離に存在していた。

顔を振り払えば、両腕で押し戻せば、状況を終わらせることができる。

しかし、それは許されなかった。

カノジョが先に、状況を終わらせたから——

「やほー、光太あー、遊びに来たよー、お？」

第三者の登場に、二人は静かに、視線だけを声のする方へと向ける。

「……光太、それ、今、何やつてるのかな？」

（いや、何も、やつてないよ）

光太の言い訳は、声にもならない。

今この部屋で、カノジョの許可なくできることは、ただ一つしかないだろう。

（俺、なんであのとき……）

後悔だけである。

しかし今なお、囚われずに自由な発言をするものが一名。

「あ、林さんだー。あのね、紬、今日から松田くんのメイドさんになつたのー！」

ご主人様にされた光太はベッドに座り、目の前のメイドもどきを疎ましげにも眺めていた。

「そ、そんなことないもんつ。紬、実は凄いんだから！」

確かに、晩飯の食いつぶりは凄かつたな」

紬の「メイドになります」宣言に対し、やはりと言うべき肯定を示したのは幸子だった。

破天荒な幸子にとって、「メイドになります」宣言は大変に美味だ。そのままに同棲とあっては、断る理由など全て排除。紬

に一発許可を出し、早速夕食をともにしていた。

「ぶー、松田くんの意地悪」

「ご主人様』じゃなかつたのか？」

「ちょっとと間違えちゃつただけだよつ。紬のご主人様は包容力が足りないなー」

（はあ、姉さんのメイド教育って何やつたんだよ……）

紬以上にノリノリだった幸子は、紬の願いを叶えてやるという大義名分でみつちり一時間のメイド教育を施していた。しかし、戻ってきた紬は、この有様だ。

「でもね、つむぎはそんなごしゅじんさまがだいすきなの。だから、がんばりますね」

「いや、がんばるな。棒読みが凄く嫌な予感……」

光太は溜息も保留して、紬を凝視。一挙手一投足見逃さぬ意気で警戒態勢に入る。

「つむぎははじめですけど、ごしゅじんさまのことをおもつて、うまくいくようどりよくします」

彼の警戒域にもお構いなしに、一步、また一步と、紬は近づいていく。

「待て、何をやるつもりか言つてからにしろ」

迎え撃つ光太は、座った状態のままながら、わずかに上半身を前傾させ身構えている。

端から見たら、何を子ども相手にと言いたくなるような状況だが、相手は半端ではない。

（姉さん直伝だ、絶対とんでもないことするぞ）

（えつ？）

油断した。紬の抑揚が戻った科白に、彼はつい、油断した。

「えいっ！」

接触まであと一步という厳戒態勢の中、彼女は彼の首をめがけて、思いつきりジャンプ。

「ちょ、うあっ」

（ぼふつ

狙い通り命中した勢い余つて、紬はそのまま、光太をベッドに押し倒した。

「何やつて——」

突然の強行を聞いただそうとする彼の口を、紬の人差し指が塞いだ。

「しーつ、紬に任せてくれ……」

氣付けば組み敷くように、紬は四つん這いで光太の上位にいる。

「はいはい、もう、何でも好きなことしてくれ……」

「たっくさん、ご奉仕しますからねっ」

彼女の強い眼光を見て、彼は諦めるしかないと思つたのだろう。もはや警戒することもばからしく、溜息混じりに瞼を閉じる。

（メイドねえ。……ん？ 姉さんの言うメイドって、まさか、お

「なるほど」

瓜二つ。だが間違いのない二人。

ベンギン柄の可愛らしい眼帯をつけてる無愛想な方が撫菜だとすれば。きやらきやら明るく笑っている方が鈴菜って事になる。

こんな事があるんだ。

目の前で起こったあの事故からすれば、奇跡としか思えない光景。

医学的にどうだったのかまでは知るよしもなかつたけど。虫や小動物の命をいくつか見送ってきた子供のわざかな経験からは、あの時点で二人は終わっていたはずだった。

それきり彼女たちと会うことは出来なかつたが。悪ければあのまま命を落とし、よくても生涯嚴重介護トは間違いないと信じていた。

しかし今、鈴菜は立つて歩いているし、撫菜はちゃんと僕の目を見て会話している。

「わ」「きや」

双子に歩み寄り、一度に抱きしめる。

買い物袋が落ちた。

撫菜と鈴菜の、身体を、実体を感じる。幻覚でも幽霊でもない。

二人をすぐつた現代の医学に。いや、神でも悪魔でも。僕から送れる最高の感謝を。

「泣いてる」

「そんなにも私たちに会いたかったんか。うむうむ、愛い奴め」

どちらの反応も七夏の予想外。つまりは現実だ。

「ごめん、ごめん、ごめん」

「うわ、泣き虫だね、ナナちゃんは」

「なるほど」

瓜二つ。だが間違いのない二人。

ベンギン柄の可愛らしい眼帯をつけてる無愛想な方が撫菜だとすれば。きやらきやら明るく笑っている方が鈴菜って事になる。

こんな事があるんだ。

目の前で起こったあの事故からすれば、奇跡としか思えない光

景。

医学的にどうだったのかまでは知るよしもなかつたけど。虫や

小動物の命をいくつか見送ってきた子供のわざかな経験からは、

あの時点で二人は終わっていたはずだった。

それきり彼女たちと会うことは出来なかつたが。悪ければあの

まま命を落とし、よくても生涯嚴重介護トは間違いないと信じ

ていた。

しかし今、鈴菜は立つて歩いているし、撫菜はちゃんと僕の目

を見て会話している。

「わ」「きや」

双子に歩み寄り、一度に抱きしめる。

買い物袋が落ちた。

撫菜と鈴菜の、身体を、実体を感じる。幻覚でも幽霊でもない。

二人をすぐつた現代の医学に。いや、神でも悪魔でも。僕から

送れる最高の感謝を。

「泣いてる」

「そんなにも私たちに会いたかったんか。うむうむ、愛い奴め」

どちらの反応も七夏の予想外。つまりは現実だ。

「ごめん、ごめん、ごめん」

「うわ、泣き虫だね、ナナちゃんは」

「ごめん、撫菜。ごめん、鈴菜」

「あいたた。イタ、痛い！ 痛いってば！」

「あうち、あうち」

「あ、ごめん」

意外なぐらい強い力で、僕の両腕はふりほどかれた。

「や・り・す・ぎ！」

鈴菜は両腕を腰に当ててぶんむくれる。

「ナナさん、あたしら抱き潰す気ですか？」

「ごめん」

「なぜナナはそんなに謝るの？」

ハイテンションな鈴菜とは対照的に平静に尋ねてくる撫菜。そ

の眼帯がどうしても目に入つてしまふ。

あの事故が幻ではなく、現実の出来事であつたという、今となつてはただ一つの確かな証拠。

「……君らを苦しめたのは僕だし」

「ナナに謝られる筋合いいから」

謝らせてもられないっていうのか。

「ご、ごめ……ごめ……くつ」

「こりや、ベンベン」

鈴菜は姉のおでこをぺちん。とはたいた。

「あうち」

「泣くなナナ。おねいちんは言葉足らずだ。気に病むなつて言つてるの」

鈴菜の言葉に応えるように、撫菜は無表情で僕の頭を撫でた。

「でも」

女の子の顔に一生モノの傷。あの右目もきつと。  
例え二人が許してくれても、僕は自分を許せない。

「……もう二度と無いと思つていたはずのチャンスが得られたん  
だから……少しでも借りを返させてよ」

「期待しないで待つてたるナリよ」

「はげどう」

「ありがとう！」

「あうち」

「痛いつつーの！」

思わず抱きついた直後、鈴菜の蹴りに吹き飛ばされた。

鈴菜の怒り顔が、撫菜の無表情が、ちょっとだけ嬉しそうに見えた気がしたのは、気のせいではないと思いたい。

「もしもし、感動の再会はそのぐらいでいいか？」

「あ、すいません」

他人の家の玄関先でとんだ愁嘆場を演じてしまつた。恥ずかしい。

「いや、俺は面白いんだがな。せっかく淹れた茶が冷えそうだつてゆつかが氣を揉んでる」

篤史兄さんが親指で示した背後では、お盆を手にした結香さんがそわそわしている。ああいうところ、見た目にそぐわらず子供っぽい。

「しつれいしやしたー」  
鈴菜がびしっと敬礼。撫菜も無言で同じボーズ。

「おう、問題ない」

篤史兄さんが、すぱっと答礼。

(おいおい、どういうことだよ……)

まさかの事態に再び頭を抱えるも、紬も幸子も全く気にしていないようだ。好き勝手に話を続けている。

「うんうん、可愛いですよ、紬さん。さつすがは私の義妹！」

「えと、あのー、その、義妹とゆーことはー」

「光太の彼女ですもの。『義理の妹』はまだ早いかも知れませんけど、妹みたいに可愛がつちやうわ！」

「きやは、やっぱりそう見えます？ 見えます？」

(先生も喜んでるのか……。ああ、この人は、そういう人かもな……)

紬が恋人扱いされているのは不本意なことに違ひなかろうが、彼にとつて、それはまだ取るに足らない問題だ。  
しかし本当に取るに足らないと言い切れるのか、風向きは変わりつつあった。

「見えますよ。恋人でもなきや、下着を預けたりなんてできませんよねえ？」  
「はい。それに、初めて、その、裸を見せた男の人なの……」「あらまつ、そうですの？ 光太、大切にしなさいよ？」  
消え入りそうな声を出して俯く紬の肩を抱き、厳しい視線を送る幸子。

その視線の先の彼も、俯きがちである。と言うより、項垂れがちである。

「……お芝居はその辺にしてくれ。先生はとりあえず、メイド服脱いで、自分の服着て。はい、これ服」「きやつ、『脱いで』なんて。お義姉様の前で……」「誤解するな」

「んじやモノはナナの部屋に運んどいてくれ」  
「おつけーっす」

「(こくこく)」 by 撫菜

双子は篤史兄さんの投げた鍵を受け取ると、買い物袋を拾つて二号室を出でいった。

「はあ」

自然にため息が出た。

「ぐつたりしてんな。気が抜けたか？」

「ええ」

感情の振れ幅が大きくて、今になつてどつと疲れが出てきた気分。

「そう、疲れると言えば。  
あの子達やたら荷物持つてましたけど、何買いに行つてたんですか？」

「ナナの生活用品」

「は？」

「時計とかタオルとか歯ブラシとかだな。あとブリーフ派だつて聞いてるけど、それで良かっただろ？」

「ぎやーす！」

三十分ばかり後に三号室を訪れた新たな二人は、並んで深々と腰を折つた。

「宮藤初、遅参いたしました」

「同じく宮藤終、ここに」

よほど急いできたものと見え二人とも肩で息をしているが、あ

演技とは思えないレベルで頬を赤らめる彼女も一蹴。

「誤解はあなたでしよう？ 光太。紬さんが着ているのはメイド服じゃないわ。エプロンドレスよ」

「それ、同じだろ……」

引き続き結託している幸子も一蹴。したつもりであつたが。やれやれと溜息をつきながら、幸子が蹴り返してくるではないか。

「何を言つてるの！ メイド服はメイドさんの着るものよ？ 恋人をメイド呼ばわりするなんて素敵だわあ。光太もようやつと、コスプレに目覚めたのね。姉さん嬉しいっ」

「……ん？ メイド服？ メイドさん？ そつか」

紬は何かをひらめいたように、小さくパンと両手を合わせた。(はあ、またろくでもないこと言うつもりだな)

光太は次の一言を予感して、しばらく放つておく方が得策だったかと後悔し始めた。

しかし放たれた一言は、彼の予感など周回遅れにしてしまつた。

「紬、メイドになります！ 紬は今日から、松田くんのメイドです！」

## 2 彼女は邪魔者?

「メイドと言つても、やることないなあ」

光太の部屋でうろうろとするのは、紬色のワンピースに白のエプロン、まさにメイドの制服を着込んだ紬である。

「やることがないんじやなくて、やれることがないんだろう？」

察するに容易なだけに、彼は早くも溜息をつきそうな表情。

「んー、そだねー」

そんな背中越しの表情など知るよしもなく、紬は相変わらずマ

イベースだった。

「……先生、年齢で言つたら大人でしょ？」

「年齢で言つたら、去年十の位も変わつちやつたおばさんだも

ん。やつぱりどーでもいーかなー」

本当にどうでもよさげに、隠そうともせず着替えを続けている。

ショーツをはき終えると、今度はブラウスに袖を通して。無防

備とはこのことかという絵だ。

「はあ……。先生はまだ全然若いですし、可愛いですから。少し

は自覚してください」

「あ、今、可愛いって言つた？ あららー、松田くんつてば先生

のこと好きになつちやう？」

自分ではお子様だおばさんだと卑下しながらも、やつぱり可愛いと言われると嬉しいのだろう。彼女は素直に頬を染め、きやつ

きやと喜んでいた。

喜び方がまた子どもっぽいから、彼としては全く動じる余地がない。振り返ればそこに、着替え中の女の子が、自分に心を開いて存在しているのに。全く、心は揺れない。

それどころか、これ以上付き合うのも面倒だと思え、適当にあ

しらつてこの場を離れた。

「……はいはい。じゃあ着替えたら、あっちのリビングに来てくださいね」

「ふふーん、照れちやつて可愛いつ」

(照れてるんじやなくて、呆れてるんだつての……)

くまでもボーカーフエイスを崩さない。

こちらも見るからに双子。とは言つても、まだまだ子供っぽい

七瀬姉妹とは雰囲気は全く違う。

紫城高の制服である焦げ茶一色のブレザーはいかにも地味で時にチャバネ呼ばわりされたりもするが、すらりとした長身で出るところが出てる二人が着ればシンプルで格好良く見えるから不思議なものだ。

二人ともストレートのロングヘアをサイドボニーtailにまとめているのだが、初さんは右側で終さんは左側。しかも片手にだけ嵌めた革手袋が初さんは左手で終さんは右手というのが面白い(昔聞いた話だと火傷の痕とかがあるらしいけど、でもきつちりオシャレに見える)。まさに鏡写し。見事今までのシンメトリー。

いかにも瓜二つな一卵性双生児というのに、まず間違えようがないという点では七瀬姉妹と同じだ。

「申し訳ございません、篤史様」

「お待ちになりましたでしおう」

「ううん、私も今きたところだから」

「いいからほら、入れ入れ」

ここ篤史さんの自宅なんだけどね。ていうか、それむしろ女の子の台詞。

「この埋め合わせはいつか必ず」とことん真面目にできているのだろう。お姉さん達はギャグとはとらえなかつたようだ。

その心の声に偽りはなかつたが、穏やかに微笑まざるを得ないのも、また偽りのことだった。

光太がコインランドリーから戻ると、玄関には濡れた靴が増え

(姉さん、帰ってきたのか)

だからどうと言つこともなく状況を認識しながら、紬を待たせて入りリビングに入り。

「ただいま。乾きましたよーつてえつ、姉さんつ、何やつてんだけよつ！」

「んあー？ あ、お帰り」

「お帰りじやねえだろつ、それは何だ、それは」

ソファに座つてゐるはずの紬を見て、光太は驚かざるを、そして頭を痛めざるを得なかつた。

なぜなら、彼女の隣には光太の姉、幸子<sup>さちこ</sup>がいたから。もつと言えば。

「エプロンドレスよ？ 知つてるでしょ？」

幸子が紬に、それを着せていたからである。

もはや幸子に何を言つても無駄であろうと、光太は彼女をパスし、エプロンを結んでもらつてゐる紬に直接言い聞く。

「ごめん、先生。姉さん、この手の趣味が行き過ぎてで……」

すつかり勢いを失つた声を紬に送ると、あつさりと返事が返つてきた。

そう、実に、あつさりと。

「ううん、全然いいよ。だつて、これ、可愛いもんつ」

幸子の手を離れた紬はくるりと顔を向けて、キラキラの笑顔。

「あはははは」

曖昧に笑つてごまかす。

我ながら弱い。自覚はあるけど弱氣だけはどうしようもないのだ。

「構うなつて。で、こつちが問題のナナ」

いや、別に問題ありませんから。

とは言えない。

「五ヶ瀬です。初さん、終さん、これからよろしく」

「ご無沙汰しております、七夏様」

年下の僕にまでおそろしく丁寧な初さん。

「ますますお綺麗になられましたね」

終さんも目を細めて微笑むが……

そこは、立派になつて、と言つて欲しかつたところで。

どうせ女顔ですよ。青白いですよ。筋肉ありませんよ。

とも言えないと。

「あはははは」

曖昧に笑つてごまかす。

我ながら弱い。自覚はあるけど弱氣だけはどうしようもないの

だ。

わずか三分後。再び三号室に戻つてきた宮藤の双子は、同じワインレッドの、肩の出た膝上丈ワンピースを身にまとつていて。

このお姉さん達は昔から大人っぽかつた。ただでさえ制服着てないと高校生にはまず見えないつてのに、それがこんな格好すればそりやもう色っぽいのなんの。

それが並んで二人。目の毒です。はい。

「おいおい、たかがカラオケ、普段着で十分だろ？」

篤史兄さんの即座ツッコミ。ごもつとも。

さすがに薄手のワンピースだとまだ肌寒いと思うのだが。

「正式の宴だと聞き及んでおりましたので、相応しい装いをと思

いまして  
正式?」

「はい。陸奥先生は、カラオケの盛装はミニスカートと決まって  
いると」

「言つてた言つてた」

「(こくこく)」

七瀬の双子もお揃いの出で立ち。白のブラウスにチェックの吊  
リスカート。

当然のようにミニ丈だが、この子達ならカワイイですむ。

「……また十悟さんの仕業かよ」

篤史さんはでつかいため息一発。

「授業中以外の陸奥先生の発言は一切信じちゃダメですよ」

結香さんも優しい顔して結構きついな。

ちなみに結香さんは同じく白のブラウスに、胸当てのついた黒  
のスカート（サロペットスカートとかいうやつ）。に、同色のベ  
レー帽。一見フェミニンだが足トがスニーカーだったりして微妙  
に活動的。

しかし、陸奥のジュウ兄さんは紫城の先生になつたんだ。

ジュウ兄さんは歳の離れた遊び仲間の一人で、あの頃はひょろ  
つと背の高い、本ばかり読んでいた飄々とした感じの少年だった。

そのイメージと、皆の会話から想像される陸奥先生像とがいま  
一つ結びつかない。

まあ、遅くとも明日には会えるんだろうけど。

とりあえずの面子が揃つたとのことなので、篤史さんは主導で  
商店街のカラオケボックスへと移動の運びとなつた。  
そう広くもない町でいい感じの快晴もあり、学生らしく健全  
に徒步となつたのだが。

うーむ。

あまり敏感な方じゃない事を自認する僕でさえ、そこら中から  
の視線を感じて落ち着かないことこの上ない。

それは無理もない事なのだが。

個性薄めだがえらく綺麗な由香さんは言うに及ばず。

可愛らしいのが一組と色っぽいのが一組で、双子の美少女が都  
合二組。

そして先頭では、長身イケメン筋肉質の篤史さんが周囲を圧  
倒するような存在感を示している（半袖Tシャツに綿パンという  
無茶苦茶ラフな格好が寒々しく見えるせいもあるだろうが）。  
一団の最後尾を目立たないようにこそそそと追いかける。そ  
れでもたじろぐほどの視線を浴びているというのに、篤史さんや  
お嬢さん連は平然としたものだ。注目されることに慣れているの  
か、それとも神経の構造が違うのか。

「すげー、女の子あんなに引き連れてるぜ」

聞こえてる聞こえてる。

「俺、最後尾の子が好みだな」

「恥ずかしそうにして可愛いじゃん」

「どうせそんなことだらうと。

「ナナ、そのカッコむしろ逆効果だ。ボーイッシュな女の子にし  
か見えないと」

篤史さんは大爆笑。

程なくして浴室から上がつた紬を迎えたのは、綺麗にたたまれ  
たバスタオル。

「んーと、ねーねー、このタオル使つてもいいのおー?」

「どうぞ。終わつたら声かけてください。服、渡すんで」

「はーい」

(ふふうん、紬つてば大切にされてるう)

彼の配慮にご満悦で、お顔もすっかり湯上がり美人。

ひよこひよこと身体をあらかた拭いて、胸のところでバスタオ  
ルを巻くと、光太に向けてドアをノックした。

「お洋服ちようだーい」

「あ、はい」

彼は力チャヤリとドアハンドルを下げ、脱衣所で予想通りに上機  
嫌の紬に、着替えを渡した。

「うち乾燥機ないんで、今、外で乾かしてきます。それまで、ブ  
ラウスとスカート、あと気にならなければパンツまでは使えそ  
うなのが見つかつたんで。着てもらえませんか」

綺麗にたたまれた洋服を受け取ると、一番の上のショーツに、  
まだタグが付いていることに気付いた。

「これ、新品だよ? ……もしかして、変な趣味とかある? あ、  
使用済みの方が怪しいか」

「ないない。それ、姉さんの。タグ切る鍼は……つとこれです、  
はい」

彼女らしい恩も気にせぬ素直な質問に、慣れつこの光太はあつ  
さりと答えた。

慣れつこと言うより、別の心配が頭の大半を占めていたが故か

「ちょ、あの、せんせつ」

光太は咄然、後ろを向くことすら忘れ。

しかし紬は然もありなんという顔でいた。

「なーに?」

前屈みでショーツに左足を通しながら、こつちを向く紬。

普通、男の前で裸にならないだろ……」

彼はようやつと思考を取り戻し一八〇度回転して、背中越しに  
言つた。

「そうだね。でも、お子様の裸じゃ、どーだつていでしょ  
それ、本気で言つてる?」

おそらくは本気だ。

(え、えと、あの、先生、何を――)

ここまで疾しい気持ちは一切なかつた彼だが、状況と合わせて心境も一変、鼓動は唐突に早まつた。

とは言え、そんな素振りを見せるなど格好悪い。無意識に取り繕い、身体が勝手に平静を装う。

「いや、俺は、あとでいいですから」

「ううん、一緒に入る、ね?」

くいつくいつと腕を引つ張り誘う彼女に、早くも理性が負けそ

うなのは、健全な男子高校生としてやむを得ないところだろう。

(ちょ、ちょと、これつて、うあ、考えてみれば今ここつて二人

きり? 付いてきたのつてそゆこと? 据え膳つてヤツなのか?

そうなのかな?)

思考の大半は、おかしくなりつつあつた。

それでももう一步とどまるのが、男、松田光太である。

「いや、ホント。先生早く入らないと風邪引いちやいますよ?」

日頃のやる気なさげな態度も、こんなときには落ち着いて見え

るものだ。

とは言え、体内を駆け上がるリビドーに働きかけるのは、容易

なことだつた。

「うん、でも、それは松田くんもだよ? 風邪引いたら大変だから、一緒にシャワー浴びよう?」

……むしろ容易に、治まつた。

(そうだよな。夢みたいなこと起ころうわけないよな。だいたいお子様先生だしな――)

毎日顔を合わせている相手。言葉通りが真意と、酌めないわけがない。

「なんで!?」  
パーカーにジーンズなんですが。  
「身体を鍛えなくっちゃな」

結局それか……分かつちやいるんだけど。  
ケボックスだった。

連れてこられたのは、城をモチーフにした立派な建物のカラオケボックスだつた。

建物の周りには空に向かつてライトが多数備えられている。夜はさぞかし派手にライトアップするのだろうが、どうにも締まらない。

昼のカラオケボックスってやつにはどうも違和感というか場末感を感じてしまうが、中に入つてしまふとそうでもないのが不思議だ。

「11号室でお連れがお待ちです」

アルバイトっぽい店員のお兄ちゃんは冷静を装つていたが、頬の紅潮は隠せない。

そのときは結香さん＆ツインズズの威力だとばかり思つていたが。

「おー、場所取りご苦労」

11号室の先客は、たつた一人で僕ら全員分ぐらいの強烈なインパクトを放つていた。

虚空を見つめていた瞳がすすつとこちらを向く。

精緻な彫刻を思わせる、一分の隙もない硬質の美貌。

超ロングお姫様カットのド銀髪はボックスの薄暗がりの中でなおキラキラと自己主張し、深い紫の瞳・同色のワンピースと強烈

「……そうだな。でも、心配いらないから。それにまずいだろ? 男女で一緒とか

彼は多少肩を落としながらも、もはや気にすることなく断る理由を告げた。

しかし、彼女はまだ諦めていないらしい。親切もいつの間に押し売りだ。

「どーセ紺はお子様でしょ? いいじゃない、一緒だつて」

「うあ、先生ずるつ! そこでそれ言うか?」

「ふふーん、大人をバカにするからだよつ。でもホントに、一緒でもいいんだよ? 紺、気にしないし」

「お子様相手に欲情したとあつちや、俺が気にする」

「うー、ならいいもん。風邪引いちやえーつ」

紺はぶいと後ろを向き、ブラウスのボタンを外し出した。

それを見て光太は、小さく笑顔を作つて脱衣所を出た。

(もう機嫌が直るとか、ホント、子どもっぽいよなあ)

公園での紺を思い出しながら、扉の向こうの様子を窺う。

——バタン

浴室の扉が閉じた音を確認すると、再び脱衣所に入り、衣服を拾い上げた。

(やつぱりなあ。女の子なら普通、たたむだろ?)

——シャー……

(見ちやまづかつたかな、これ。パッド厚いなあ)

磨りガラス調の扉一枚隔てシャワーの音を聞きながら、光太は淡々洗濯を始めるも、はたと気付いた。

(あ。うち、乾燥機ないな。とりあえず、替えの服探すか……)

普通の、あつたかなあ……)

なコントラストを放つていて。

こうなると面影がうんぬんいうレベルではない。こんなあり得ない色合いの人物といえば記憶の中でただ一人。

「やつほーしのりん」「(ペこり)」

「こんにちは、詩紀様」「本日はよろしくお願いいたします」

その人物は双子二組に会釈を返しておいて、

「場所取り? 部屋を借りるのには必要ないでしょう?」

と真顔で言った。

新川詩紀嬢。僕と同い年の、篤史兄さんの妹。

一卵性双生児二組に統いて、今度は全然似てない兄妹が揃つたわけだ。

性別や年齢、目や髪の色が少々(違つていたところで、家族には大抵どこか似た雰囲気があるものだが、

「飲み物も注文せずにただ座つてたんじゃ場所取りと同じだろ」

二人は兄妹といつても血の繋がりがないばかりか、離れて暮らしていた期間も長いとかで、見た目にも行動パターンにも共通点らしい共通点がない。

それでも、優れているとか劣っているとかではなく、方向性が異なる強い個性を持つて並び立つているという点で、二人は確かに兄妹であつた。

たとえば二人とも人目を強く惹き付ける優れた容姿の持ち主であるが、篤史兄さんはいわば「ブロンズ像」、詩紀嬢は「水の結晶」。獣に例えるなら「獅子」と「鮫」。刃物に例えるなら「鉈」と「剃

刀。

それらを似ていると言つていいのなら、詩紀嬢は篤史兄さんと  
も結香さんとも同じぐらい似ているとも言える。

この言い方で結香さんを例えて言うと「ドライフラワー」「パ  
ンダ」「独逸製高級ハサミ」ってところかな。自分で言つてわ  
けわからないが、そういう印象を受けるんだから仕方がない。

ともあれ、詩紀嬢の愛想不足＆ちょっとズレた感性はあの頃と  
変わつてないようだつた。

「歌つていればよかつたのに」

言わずもがなの事をいう結香さん。

「一人で？」

案の定というか、詩紀嬢は、はあ、と聞こえよがしにため息を  
ついてみせた。

「この期に及んで何て迂闊な」

「ああ、その辺は自覚してる。俺ら鈍いし」

「だから難しいことはのりちゃんにお任せなんだよ」

「……お二人の息がピッタリで嬉しいです」

皮肉。そしてまたため息。

「ソロあるいはデュエットまで。合唱禁止。私は決して歌わない。  
以上の条件で手を打ちましょう」

「なに、しのりんて音痴？ ねえねえ」

「そういや詩紀の歌、聞いたことないぞ」

食いつく鈴菜。燐る篤史兄さん。

「去年一度聴いたかな。そうそう、あのときはいきなり窓ガラス  
が割れちゃつて、びっくりしたよ」

そして端的に語る結香さん。  
誹謗のつもりは、無いんだろうな。きっと。

「うお、まじジャイアンかつ？ ジャイアンのかつ！」

確かに詩紀嬢は昔つからそういう偶然を呼ぶタイプだつたが、  
それを理由に歌いたくないとまで言い出すとはちょっと驚いた。

まあ、ごらんの通り態度は偉そだが、見た目相応に繊細など  
ころもあるってことだ。

それでもオザキねえ。実は意外と荒んでるんだろうか。  
背筋を冷感が走りぬける。

やば。

彼女の視線にこもった迫力は肉食生物同然。しかも獸ではな  
く、魚類や昆虫のようなハンティングマシーンじみたそれ。  
「や、やあ」

相手を知らなければ殺氣と勘違いしかねない圧迫感だが、彼女  
に害意はない……と思う。

思いたい。

彼女が何考えるのか全然まるつきり分からぬ。昔から基本  
的には落ち着いた少女だったが、表面的な感情の振幅がさらによ  
く層小さくなってしまった感がある。明るさとかわかりやすさとか  
いう成分が、彼女の中から綺麗さっぱり欠落してしまつたようだ。

「いや、その態度が——」

子どもなんですよと言いかけてたとき、彼の目に細腕が映つた。  
(ほら、そんなんじや邪引きますよ……)

ピトツとブラウスが張り付いき、ブランコの鎖を小さく振るわ  
している。

「まあ、とにかく。うち近いんで、ほら、行きますよ」

「……仕方ないから、行つてあげる」

カタンと音を立ててブランコから降りる。

重く濡れた服で、二人は足早に公園を去つた。

「ただいまー。姉さんいるー？」

玄関から家の中に向かつて、彼、松田光太は叫んだ。が、全く  
応答はない。

「珍しいなあ。この時間にいないなんて……」

光太が首を傾げてゐる間に、彼と、隣の風間紬からは、ピチ  
ヤピチャヤポタポタと雨のしづくが落ち続けてゐる。

「えーっと、とりあえず、シャワー浴びましようか。こつちです」

靴を脇ぎ廊下に上がると、彼は手を差し出した。

「ありがと。優しいね」

「ずぶ濡れのお子様相手に冷たくできないでしよう？」

「うー、お子様って言うなあ」

手を取つた指先は冷え切つており、早くシャワーにと思うも。

彼女は片足を上げようとして、再び、パンプスの中に戻した。  
「どうしたんですか？」

「床、濡れちゃうよ？」

足下の水たまりを見て、自分の状況に気付いたらしい。



マイクを手に斜に構え、足でリズムをとる立ち姿もアイドル顔負けに決まっている。

歌つてるのが古い特撮でなければの話だけど。

ちなみに古いといつても僕らの子供時代ってわけじゃなく、映像の雰囲気からはおおかた数十年は経つてゐるだろう。

大鉄人とか小さな超人とか、全然しらないのもあれば、見覚えがある蜘蛛男だと思つたらなんか古くさかつたり。

僕的にはあきれかえるしかないのだが。結香さんは完璧についている様子。さすがは篤史兄さんのカノジョ。

鈴菜は曲にあわせてエンドレスで踊りまくつて。体力あるなあ。

撫菜は最初は部屋のあちこちを仔細に観察していたが、一通り調べ終わつてからは曲カタログを一ページ目から順番に読んでいる。一見退屈そうだが、密かに靴を鳴らしているところを見ると、少なくとも音楽を楽しんではいるのだろう。

邪魔にならず、かつ、歌をちゃんと聴いてることをアピールするような絶妙な手拍子と合いの手は宮藤姉妹によるものだ。微笑みながらも彼女たちの目は真剣で、楽しみつつもどこか仕事をこなしているような印象がある。こういうところ、つくづく生真面目というか裏方志向のお姉さん達だと思う。

詩紀嬢はといえば。

ソフトに言うなら、目を閉じてじっと瞑想にふけつて。歯に衣着せず言えばまるで息をするマネキンといった具合。意識して周囲との関わり合いを断ち、感情を抱くことさえ拒んでいるようには見え感じられる。

そうは見えても少しぐらいは楽しんでくれてはいるはず。僕は信

じる事にしていたのだが。

しかし見てしまった。見えてしまった。

視線を感じたのか搔き上げた髪の間からのぞいた可愛らしい耳には、黄色い耳栓。

……やっぱり義理で参加してゐるだけかな。

「よーし、アレだ、ベンベン」  
鈴菜が動いた。

「ん」

カルタ取りもかくやという早業でリモコンをゲットするや、マシンガンじみた目にもとまらぬ指捌きで曲番を打ち込む。続いて

撫菜からマイクを受け取り、一瞬でデュエットの体勢に。思考パターンはいかにも違うのに、さすがは双子といったところか。ちゃんと通じ合つてゐるようで意思統一が早い。

流れ始めたのは映画のサウンドトラックを彷彿とさせるぶ厚いオケのイントロ。

しかしモニターに映る絵面はおもいつきアニメだつたり。

みんな同じじゃないといい。だけど通じ合いたいからみつけよう。さがしだそう。みんなの心を閉ざすものフタがあつたらはずしたい。鍵があつたらこわしたい

ハートの檻を解き放て Open Their Mind! チカリカ!

七瀬の双子も上手いなあ。

非対称のややこしい振りと同時に、メインとサブが複雑に入れ替わる複雑な掛け合いを完璧にこなしてゐる。

れている。そんな宮村先生が「冬服眼鏡つ娘党」になんの用があるのだろうか。そのお願いが五人兄弟たちに関係があるなんてとうてい想像できなかつた。

であり、長年の活動による無数の資料が木の年輪の様に積み重なつてゐる。

普室の男を見ると城がりの普室いに一カリと穴が開いた。

そうにセーラー服が置いてある。それも冬服のセーラー服である。これは我が冬服眼鏡つ娘党的ご神体である。このご神体は冬服眼鏡つ娘党的誕生には欠かせないものである。

子の制服をセーラー服、それも冬服に限定する。同時に眼鏡の装着を義務化する」と言い出したことに始まる。男子でありながら、女子の制服を着こなすという奇特性の生徒であつた誠には男女を問わず信奉者が多く、無謀極まりないアイデアにも関わらず生徒達の支持を集めていった。しかし、生徒達の支持にもかかわらず、教職員やPTAの役員達には当然聞き入れられず全く無視された。誠はこの事態にも全くひるまず、新たなアイデアでこの製作を実現することにした。生徒たちの圧倒的な支持の元で誠は学校内に宗教法人を設立し、生徒たちの願いの力によって、政策を実現することにしたのであるこれが「冬服眼鏡つ娘党」の始まりである。

生徒会長は「冬服眼鏡つ娘」に集まつた。願いの力によつて「冬服眼鏡つ娘」の制服化に成功した。その後、願いの力によつてかなつたとはいへ、事態を良く思つていなかつた教職員達が制服をブレザーに変更するまではその効力は維持された。

というわけで、今では完全に形骸化している宗教団体であるが一度認定された宗教法人やご神体をむげにするわけにもいかず、学内に宗教団体があることによつて、生徒の願いを集め困つた生

きっと相当歌い込んでいるんだろう。  
しかし、これは……

もとめよう 広げよう みんなの心は一続き  
生け垣なんて丸坊主 高い塀でも大爆破

ノリノリだけど妻い歌詞。

モニター上では二人のツインテール少女がモンスターの群れを蹴散らしている。

「人の得物は巨大な釿抜きも、一人ははかでかい電動ドリル。次々にシルエットとなつて爆発、滅びていくモンスター達（察するに露骨に描写するに忍びなかつたんだろう）。

ひつばがせ  
破りとれ みんなの心は丸裸

ハートに開けろ風穴を  
Open Their Brain! チカリカ!

「どう？」  
寂してされ  
これ しりんが意味で

なんで篤史兄さんが威張るのだろう。偉そうな似合つてゐるの否定しないけど。

子供向けのアニメなんですよね??」

「大きなお友達にも大人気だぞ。子供向けには複雑すぎる話とか、分かる人にはわかる古典を下敷きにした高度なネタも多いし

「鏡つ娘党」は維持されていた。

その後七瀬姉妹はアニソンを乱発、宮藤姉妹は女性デュオの有名曲を一通り押さえた（選曲も含め、上手いは上手いが、むしろ危なげなさの方が強く感じられたのがいかにも彼女たちらしい）。

僕も何曲か披露させられ、

「七夏は言葉に情感をこめるのだけは上手い」（篤史兄さん）

とか  
「光景が目に浮かびます」（初さん）

とか

肯定的だか否定的だかわからないコメントをもらつた。

そして詩紀嬢はといえば、宣言通りついに最後までマイクを手にすることとはなかつた。

さて、これは十悟兄さんから後に聞かされた話だが。

僕らがカラオケに盛り上がって（一部を除く）いた頃、市庁舎の一室で別の集まりがもたれていたのだそうだ。

とはいっても、人数もずっと多く、出席者の年齢もずっと高い。

なぜか中でも最も年若い人物が一番上座の椅子に掛けており、またその脇に立っていた。ボブカットにオシャレメガネ・パンツ

ルックの女性が新川さおり、脇に控えるひょろりとした長身に丸めがねのヌーボーとした若者が陸奥十悟。すなわち、篤史兄さんや詩紀嬢の姉であるさおり姉さん、そして僕らの幼なじみである十悟兄さんだつた。

五ヶ瀬分家男A 「その七夏君の姿が見えないようだが」

十悟 「ああ、彼なら歓迎会つすよ。年の近い幼なじみ達が企画し

て、手狭な準備室は文化部の部室としてあてがわれている。そん

取り繕うように真由美はいうが、だまされないと、返せ、俺の願いと秘蔵のお宝と尊嚴。

昨今、祈りはかなうものと信じられている。人の願いを現実世界に投影するリアライザーの発明というか発見により人々の神々への信仰、願いといった力のある想いが物理世界に還元されるようになった。原理は解明されつつあるというが、僕にはよくわかつていないので、説明されても理解できるものではないという事は理解できるが、リアライザーの発見当初、発見者に関連する宗教法による、地方都市の占拠事件などもあり、リアライザーのもちろん、発見当初は宗教法人ではなく、行政機関や一般企業での応用も検討されたが、想いを集めるという部分に置いてはある種の、信仰・信奉といった宗教的な願いでなければ実現できないということが判明した。

政府は登録された宗教法人にリアライザーの使用を許可するとともに、願いの一一定割合を行政目的に使用させる「宗教法人による現実化装置運用に関する法律」を制定し、その運用を開始した。

様々な願いがかなえられ、現在解明されている物理法則に超えた技術を教えていた建物は今も残っていて部活動の部室として利用されている。広くて大きな作業部屋は運動部の道具置き場として、手狭な準備室は文化部の部室としてあてがわれている。そん

寬は校舎から文化部部室棟に向かつて歩いていた。

遙か昔、十五年ほど前に工業高校から普通高校に変わった工業高校の時には活気に満ちていただろう、木工や鉄工、機械と言つた技術を教えていた建物は今も残っていて部活動の部室として利用されている。広くて大きな作業部屋は運動部の道具置き場として、手狭な準備室は文化部の部室としてあてがわれている。そん

たんだそうで」

五ヶ瀬分家男A 「はあ？ 七家会議をさしてまでの用かね？」

古老・重鎮達が居並ぶ中、十悟は若輩としては無礼とさえ言える態度を続けつつ、それを咎めようとする空気をすいすいと受け流している。

十悟 「十家会議つすよ、今は八家でも」

二百年をおいても新参扱いされ続けている宮藤の当主が、予想外の援護射撃に頭を下げた。

陸奥分家男 「遠野もすでに滅びた。やはり七家でよからうよ、本家の坊」

十家の末席であった遠野家の最後の一人はこの場に呼ばれていない。

陸奥分家筋の男が苦々しげに言つた。

十家の末席であった遠野家の最後の一人はこの場に呼ばれていない。

十悟 「俺の教え子を無視しないでくださいよ、おじさん」

男は嫌悪感をこらえきれぬ様子で、ふん、と鼻を鳴らす。

陸奥分家男 「人ですらないあんなモノを十家とは認められんよ」

十悟 「俺もさおりも似たようなもんだ。『血が出なかつた』あんたは只人かもしねないけどな」

十悟は意識して口調を崩し、露骨に挑発する態度をとる。

陸奥分家男 「何だと？」

そのとき、沈黙を守っていたさおりがようやく口を開いた。陸

奥家内での小競り合いを完全に無視して、強引に話題を戻した形だ。

さおり 「七夏君を珠坂に呼んだのは『両親が長期出張中の彼に一人暮らしをさせておくのは忍びなかつたから』でしたわね、確か。

ご両親の意志に反して未成年に五ヶ瀬家の看板を背負わせるわけだ。

古くない部室を見渡すと、以前校長室で使っていたと言われる

鋼製のドアを力を込めて開けると、部屋の中から蒸し暑い空気が流れてくる。元々遮熱などは考えていない上に長年の劣化で通気性の良くなつた部室だが、春から初夏に変わりつつある季節の日差しは部屋を天然のサウナにしてしまうのには十分なようだつた。

古くない部室を見渡すと、以前校長室で使っていたと言われる古い応接セットのソファにぐつたりと腰をかけて、シャツの裾を持ち上げて下敷きであおぐ男子がいた。眼鏡つ娘党の二人しかいない部員の一人、山本修だつた。

「遅えよ。暑くて死ぬかと思ったぞ」

顔をこっちに向けるのもだるいという様子で、下敷きをあおぎつつけながら言つた。

「いつ来るなんて決めてないだろ。それに暑いなら窓を開ければいいじゃないか」

寬は長年の埃がサッシに詰まつてしまつて車輪が欠けているのか重くてなかなか動かないサッシをふんぬと力を入れて開ける。いくら力を入れても手の平ぐらいしか開かないサッシだったが、締め切つてはマシで、外の涼しい空気が吹き込んできた。

「その窓を開けるのはお前の仕事だしな。それにそろそろ来るんじゃないかと思ってたんだ」

外からの涼しい風を感じるために、修はぐつたりとした姿勢から体を起こした。

応接セツト周りには金属製の書類キャビネットが所狭しと置い

食事が始まるとき突然、左手にお茶碗を持ったまま真由美が立ち上がった、唐突な上にマナーのなっていない姉である。

「大発表がありまーす」

いつもながら脳天気そうなである。

「私、今日からまたこの家に戻ります。またよろしくね」

「え？」

普段は意見の合わない双子だが、こんな時は恐ろしいほどにタイミングが一致する。

「大発表過ぎるだろ。今日からだなんて」

「だいたい部屋はどうするの。また寛と同じ部屋なんて私嫌だからね」

心底嫌そうな顔で麻美が言つた。そんなに嫌そうな顔をされると困るが、寛も高校生にもなつて双子とはいえ男女が同じ部屋になるのは困ると感じた。

「心配いらないわ。部屋を増やしたから」

「どこにそんな金あるんだよ」

そもそもこんなボロ家、改築したら壊れるかもしれないじやないか。

「ん、増やした？」

ふと、寛は疑問に思つた。

「うん、家守様にお願いしての部屋の隣に部屋を増築してもらつたのよ」

家守様はうちの守り神であり、普段から家族が家内安全や健康を祈つている。母が家守様の名前を挙げたと言うことは、家守様に祈つておる力を使つたということだろう。確かに兄弟が大きくなってきたことで、家守様の力を使うことは少なくなつてきていた。

「ん、増やした？」

ふと、寛は疑問に思つた。

「うん、手を回してその長期出張を仕組んだのもここにいる誰かなのだろうが。」

五ヶ瀬分家男B 「とは言つてもなあ。彼は」

十悟「何も知らないうちに珠坂を離れたんだ。彼にとつてここは、ただの懐かしい故郷でしかないんすよ」

五ヶ瀬分家男A 「ではなおさらだ。多大な犠牲と引き替えに、『血の出る』榮誉に与りながら、何も知らずにのうのうと過ごすなど

というのは、我ら斗流全体に対する裏切り行為とは言えないか。何なら儂があの小僧に自分の立場というものを……」

本音を口に出しかけた古老の一人が、さおりの一瞥で口をつぐまされる。

第一位新川家の当主という立場や家の格からくる発言力だけで黙らせたのではない。

新川家は前々当主時代に序列二位の仁藤家からその地位を譲讓されており、八葉・宮藤・遠野と比べてもさらに新参の家だ。表向きの序列はともかく、このような場では旧家の重鎮達には軽んじられてもおかしくない立場と言えるし、前々当主引退後の当主（篤史の父親）の時代には實際そうであった。

しかし、現在さおりが斗流宗家代行をつとめているのは純粹に実力によるものだ。

かつて米国留学時代に『ハートの女王』の異名をとつた彼女がその気になれば、屋敷の広間に詰める五十人弱を一人で斬り伏せられるだろう。『血が出なかつた』故に健在で勢力争いにうつづを抜かしていられるような彼らでは、『血の出た』本物の斗流継承者にかなうべくもない。

た。寛はそれを見越して、いざれ自分のために力を使えるのではないかと考えてのだが、家を改築したとなれば、家守様の力はかなり使われてしまつただろう。

「ただ、そのまま、部屋を増やすと一階よりも二階が広くなつちやうから、あんたたちの部屋も少しづつ狭くしてもらつたわ」

寛ががつかりしながらうなだれないと母が更に衝撃的な事実を伝えた。部屋を狭くだと。勝手に部屋を狭くしたということは部屋の中のものの配置が変わつてゐる可能性がある。

「空間は有限だから、狭くするときに、ちょっと家具を動かしたわよ。真由美と二人で。おもかつたわー」

安心してね。寛のコレクションはちゃんとまとめて置いたから

真由美が寛の一一番気にしていた事を言った。寛は普通の高校生であるから、性についての興味も普通の高校生並にある。ただ、

そのコレクションを親兄弟の目に付く所に置くことは出来ないので、机の引き出しの奥やベッドの収納の奥など出来るだけ探しにくい所においていたのだ。それを母親と真由美に見つけられてしまつたのである。高校生にとって一番センシティブな話題を出してくるとは許せない。麻美は不潔なものを見目で見てくるし散々だ。

思い返せば、帰つてくるときに自宅を見たときに感じた違和感。真由美姉が帰つてきたことを違和感として感じたのだと思つていたが、自宅が広くなつていていた事が違和感だったのだろう。部屋が増えるというありえない事態が、あまりに自然に発生したので、それに気がつかず、違和感という形で感じていたのかもしれない。

七瀬家古老「まあまあ、五ヶ瀬さんのお気持ちはありがたいが、抑えてください」

ややあつて、別の方向から取りなしが入つた。柔和な顔の老人である。

七瀬家古老「あれは誰を責めることもできん不幸な事故だつた。幸いうちの曾孫達は命はとりとめてくれたし、不幸中の幸いか、『血も出てくれた。』

さおりは一見落ち着いた表情を崩さないが、幼なじみの目が笑つていられない事に気づいた十悟は思わず身震いする。他の誰も気づいていないが、さおりは猛烈に機嫌を損ねてゐるようだつた。

七瀬家古老「時に、七夏くんもそろそろいい歳じやないかね？」

さおり「とおっしゃいますと？」

七瀬家女A 「いやですねえ、結婚ですよ、結婚」

七夏は当年とつて十七才である。

さおり「……いかに我々でも学校に通つてしまつてゐる人間の年齢まではごまかせませんが、関係者全員消すにもちょっと数が多くませんか？」

発言内容が洒落になつてゐない。これはやはり相当怒つてゐる。

七瀬家古老「いや何もすぐには。ほれ、篤史くんと同じですわい」  
あわてずあわてず、と老人は両掌をあげた。

七瀬家古老「七夏くんからしてみれば、言葉は悪いがうちの曾孫達を傷物にして、両親まで奪ってしまった事になるわけだし、きっと責任を感じておるじゃろう。どちらか一人引き受けにいただけ」という約束だけでもできれば、彼の気も少しでも晴れるかもしれんし、このじいも安心してお迎えを待てるのじやが」

言葉は柔らかいが脅迫意外の何者でもない。

五ヶ瀬家一同がざわつく。

……このじいさん絶対百才まで生き残るタイプだ。この場でさおりに首領ねられなければ。

十悟は落雷を恐れるかのように長身を縮こまらせ、おそるおそるさおりの表情をうかがった。

しかし、さおりはむしろ上機嫌そうに笑っていたし、その返答は意外なものだった。

さおり「篤史ちゃんは責任のために彼女と一緒にいる訳じやありませんし、ベンベンやリンリンにもいつかそういう相手が見つかりますよ」

七瀬家古老「じじいの目から見ると、あれらも七夏くんを憎からず思っていると思いますがのう」

さおり「そういった好感なら私も十分抱いていますよ。ただ、結婚相手となると七夏くんは詩紀ちゃんの予約済みらしいですか」

「ファッショングラスの奥の目が、子供のような悪戯っぽい笑みを見せる。宗家の資格を持つ詩紀（現在はさおりが代行）の婚約に関する

突然の発表である。自分で振ったのだから責任を果たしたのみとはいえ、当然のようになにかした会議を一喝でおさめてのけたのは、流石さおりというところであった。

つきあいの長い十悟とはいえ、さおりの真意を量りかねることも多い。考えるだけ無駄なのだから大抵は聞き流すのだが、さすがにこれは捨て置けず、会議がハケてから個人的に質問してみた。

さおり「推理よ推理。七夏くんが告ってる可能性はほとんど無いから」

十悟の目から見ても幼い頃の七夏が詩紀をお気に入りだったのは確かだし、詩紀は自分自身にも他人にもとんと興味を示さないが、七夏相手の時だけは比較的愛想があった（よう見えた）。

十悟「つて言つてもな、お前。公式の場でぶっぱなして、後で違つてたら冗談ですまないだろうに」

さおり「あの頃とは違う。選択はなされるわ。ちゃんと成長してるし、善惡の基準も好惡の感情も学んでる。あとはヒトとしての自分との折り合いの付け方だけ」

十悟「はあ？」

さおりは眉をひそめた。意外につぶらな瞳にはあきれたような色がある。

さおり「あきれた。鈍い鈍いとは思つてたけど。この期に及んでまだ気づいてなかつたの？」

十悟「何のことだよ」

この女、核心の周りをくるくる回るような説明しかせずに相手の困惑を楽しむようなところがある。十悟がむつとしたのも無理由美それ以上聞くことはしなかつた。

「いいじやん、寛になんて気を遣う必要ないし」

今度はしつかりとせんべいを離していた。

「帰つてたんだ」

「うん、ちょっと前に着いた」

真由美と寛は十二歳が離れた姉弟である。そのため、真由美と寛が同じ家に住んでいたのは寛が小学校に上がるまでで、真由美は大学に入つてからは長期の休み意外は実家に帰らなかつた

ので寛は真由美の事は姉と言うよりもちよつとした親戚くらいに感じている。そんな姉が自分の家でくつろいでいることに、やっぱりこの人も兄弟なんだなと考えていた。

子供の頃から年上の女子の代表だと思っていた姉は久しぶりに見てもやっぱり大人で、つやのあるダークブラウンに染まつた髪は肩の上あたりでそろえてあり、振り返つた顔にかかる髪が色つぽかった。時間に負けるものかと装備されたファンデーションは完全武装されつつも横顔に若干の無防備な部分を残しており、白から薄黄色へのグラデーションに若干の哀愁を感じた。セルフレームのコンタクトお休み用の眼鏡から覗く瞳にはマスクカラとアイシャドウが施されていて、口にくわえたせんべいと身にまとうゆるゆるのジャージとの対比で逆に魅力が増しているように感じた。

「なにじつと見てるのよ。はずかしいじやない」  
目をきっと細めて怪訝そうな顔をして真由美が言った。  
「別に」  
自分の妄想を見透かされたような言葉に動搖を感じながら寛はそう答えた。

「いつまでいるの」

「まだ、ひみつー」

真由美姉は昔から寛に対して秘密を作りたがつた。姉の秘密はいつも結果としては悪い結果になることはなかつたので、寛は真由美それ以上聞くことはしなかつた。

自室に入つて、一小時間くらい復習をしたり、横になつて本を読んでいると、階下から呼ばれた。夕食のようだ。

リビングに入ると食卓には、真由美の他にいつのまにか帰つてきたのか、双子の妹である麻美が座つていた。

「おう、おかえり」と麻美に声をかける。

「ただいま」

仮頂面のまま、麻美はぼそつと応じた。

双子の兄妹として育つた寛と麻美は、兄妹である以上に同い年のライバルだった。小さい頃から競い合つてきたが、高校生になり別々の高校に通つようになつてからは、寛は理系、麻美は文系であることもあって競い合うこともなくなつてきていた。最近の麻美の素つ氣ない態度に寂しさを覚えつつも、兄妹つてはそんなものだらうと考えていた。

食卓には母、真由美、麻美、寛の四人が着いている。いつもバイトため帰りの遅い姉の美紀と父は除いての夕食になるようだ。

東雲家は食卓にそつた三人の兄弟に加えて、美紀と家を出て働いてる兄である誠を加えた五人兄弟である。長女の真由美と寛と麻美の双子年の差は十二歳もあることもあり、全員がそろうのは年末年始くらいである。

# 東雲家五兄弟記録簿

なぎ

（冬服眼鏡つ娘党事件）

普段見慣れているものほど、変化に早く気付くことが出来ると思っている人は多いだろう、しかし、実際には自分が見慣れているものほど先入観にとらわれて変化を認識することができない。全体が見えないものであればなおさらである。

学校の正規の時間割を終わらせてからの退屈な自己学習の時間が終わるとすっかり夕方だった。寛は新緑の暖かさと、始まつていく夜を迎えるキンとした涼しさを感じながら自転車を走らせていた。ふと自宅のある方に首を向けると遠目に自宅が見えた。少し前までは見えないくらいに真っ暗だった気がするから相当に明るくなつたのだろう。その変化に口元がにやつしながら自宅を見続けるとザラツとした感触を脳に感じた。何かが違う気がする。違う家かとよくよく見てみると、やはり自宅である。自宅に相違ないハズなのに感じる違和感を気にしつつも、家に帰ればわかるだろうと夕闇に吸い込まれるように緩慢になる足を進ませた。

自宅に着いてみると先ほど感じたような違和感はなくなつていた。周りの家から比べると完全に取り残されたような古い我が家、黒ずんだベージュの壁と塗装の剥がれ書けたトタンの屋根。台所から漏れる光が薄闇から手をさしのべている。

いつもより丁寧に納屋に自転車を止めつつ、見上げてみてもいつ通りの我が家だった。

なかろう。

さおり「望みは現実となるのよ。きまぐれな女神のお眼鏡にさえかなえ巴」

そう言って、さおりは意味ありげに笑った。

さおり「だつてここは珠坂なんだから」

## 4／3 火曜日

三号室の洋間の一つはシアター化していた。

壁の一面はびっしりとDVDが埋め尽くしている。

僕と篤史兄さん・結香さんの三人は、六畳一間で大型テレビと大型スピーカー六本に囲まれ、アニメ鑑賞会の真っ最中であった。

朝食をお呼ばれしたらそのままとつしまつてしまい、昨日の篤史兄さんの宣言通りこの部屋に引っ張り込まれたのだ。

正確には『指定侵入少女チカリカ』。医師の資格を持つ新進気鋭の天才亀丸監督が弱小アニメスタジオ『AMIG』を率いて生み出した奇跡のオリジナル作品、テレビアニメ界に打ち立てた金字塔だ。作画のクオリティーは当然として、動画枚数の割に緩急のある動きや、芸術のレベルに達した塗りや背景、異常なまでの音声の作り込みと、尋常でないこだわりの塊だ。完全プレスコつて事も含めると、スタッフの手間という観点においては劇場版並みの努力が払われていると考えていいだろう。すなわち、これは制作に関わった者すべての魂の結晶。心して鑑賞するように」

「は、はあ」

「俺たちこっち寄るから、ナナはしつかりセンターに座れよ。そ

の方が音像がおちつくだろ」

落ち着けと言われましても。

結香さんは篤史兄さんの足の間に移動して体育座り。小さな子供が父親の膝に抱かれるような具合だ。

「ふふふー」

「ご機嫌だな、ゆつか」

座る場所が足りないのは確かだし、二人にとつては特別なことではないんだろうけど。ねえ。年頃の男女が人目もはばからず密着されちゃこっちがいたたまれない。

と思いきや。

「えへへー」

長い長いロゴラッシュの間、音楽に合わせてゆらゆらと揺れる結香さんの頭を、篤史兄さんがぐりぐりと撫で続けている。

二人の様子はむつみ合う恋人同士というよりは、まるで小さな少女が大好きな兄にじやれついているかのよう。色っぽい雰囲気なんてまるで無い。僕が七瀬姉妹に飛びつかれるのと同じようなもの。

なにしろ結香さんの態度や仕草は見た目よりはるかに子供っぽいし、篤史兄さんと一緒に極端だ。彼女のの中身は記憶の中にいる男の子じみた少女と大差ないのかもしれない。

ああ、この雰囲気はゆつかと篤史兄さんだ。と納得できてしまつた。

こうなると、子供時代とは大きく変わった人間関係にどこか身構えていた自分に気づいてしまい、ばかばかしくなつてくる。

「ほら見る。いきなりチカリカの変身・戦闘シーンから始まるつてのには度肝抜かれた。説明とか後回しで全開バリバリだ」

今時少なくなってきた、引き戸の玄関をカラカラという音とともに開けると、また違和感を感じた。普段は感じない臭い、香水の香りだろうか。三和土を見ると見慣れない文物の靴があつた。来客が違和感の正体だったのだろうか。そうなると遠くから家を見たときに感じた違和感を感じるのはおかしい事になるが、答えたことで瞬間で考えを払い、そろりと玄関の床に足を下ろした。

「ただいまー」

寛は家の奥の台所に聞こえるように少し声を張つて言つた。自動車の数から言つても、家には母と見慣れない靴の持ち主しかいないはずだつた。

「おかげり」

ほぼ同時に返事が返つてくる。一つは母のもので間違いないだろが、もう一つの返事おかげりというよりもどちらかといふと「ほおかえりー」と聞こえた声の主は誰だろうか。普段こんな時間まで来客がいることは珍しいのでなれない感覚で廊下を進む。

玄関と居間を仕切るふすまを開いたときには答えが出た。居間のテレビの前には座布団を引き、よく言えば堂々と、悪く言えばだらしなく寝ている女性がいた。姉の真由美である。体をテレビに向かってまつ、首だけでふすまの開く音が下方向、つまりは僕の方を振り返っていた。口の中にはせんべいが収まつていて口から頬にかけてうによんといつた感じで伸びて完全に間抜け顔である。

「あ、寛ほおかえりー」

口にせんべいを加えたまま、まー姉はもう一度言つた。

「口に、もの入れたまま話すなよな」

篤史兄さんもこういうところ変わらないな。

千佳穂『皆の願いをこの身に受けて、人の手助け當てにせず』

理佳穂『頼れる者がないのなら、自分でやるが少女の意氣地』

二人『『Let's do it ourselves!』』

指を鳴らす彼女たちに応え、虚空を割つて出現する巨大な工具箱二つ。

招き入れるように開く工具箱の中へと飛び込む二人。

少女達を取り込んだ工具箱はそのまま宙に舞い上ると、怪物達のただ中へと落下、アスファルトに突き立つ。

【指定侵入少女ちかぼー参上】

【同じくりかぼー、参ります】

開いた工具箱から現れた二人は、すでに改造制服じみたコスチュームに身を固めている。

『マジカル☆クローバー！』

ちかぼーがセーラー服の胸元の四つ葉型のペンダントをつかみ、何かを抜きはなつた。

『マジカル★ボールバンク、トゥーインチドリルソー』

りかぼーがブレザーの胸ポケットから抜いたボールペンはたちまち両手持ちの大型電動ドリルに形を変える。

「ちかぼーの『マジカル☆クローバー』は抜きはなつただけの未確定形態では不可視だが、状況に応じて数々の手持ち工具へと実

体化する魔法の万能ツールだ。そのものぞばりの大バール形態の

使用頻度が高いし、チカリカのシンボルとも言える。りかぼーが常に多数のツールを持ち歩いては細かく使い分けているは対照的だな』

文字通り『バールのようなもの』ってわけか。確かに一振りで大バールに変化している。

でもってその後は虐殺モード。

なまじつか愛玩動物の形を残していく見て見た目可愛らしいモンスター達を殺して殺して殺しまくる。それはもうものすごい勢いで。殴つてえぐつて貫いて引き裂いてたたき割る。画像はシリウットでも、ぐしゃりべちゃりという音声が妙に生々しい。

「しつかし、えげつない武器ですよね」

「ファンの前で武器とか言つたら殺されるぞ。ツールだ、ツール。それより良く見ろよ」

時折描写される二人の表情は戦いに望む戦士らしい真剣なものであるが、同時に苦渋の色も宿している。

怪物に一打ちを加えるごとに、ちかぼーは露骨に泣きそうな表情を浮かべ、一見無表情なりかぼーの眉が小さく歪む。彼女らの気合いの声もまた、戸惑いと震えを帶びている（さらっと演技してしまう声優さんも上手い）。

そしていくつかのかすり傷と引き替えにすべての怪物を倒し尽くした二人は、巨大な除草バーナーで淡淡と死体を焼き払つてから工具箱の中に消えていった。

その夜、二人きりで傷を治療し合い、それから抱き合つて泣くシーンで、最初のパートが終わっていた。

そこで一端、ボーズ。

【感想、いいですか？】

【おう】

【これ、痛すぎるんですが、いろんな意味で】

【だよなあ】

よ

少年はさらに、宇宙人達を追放した者達との今後の接触を予想した。

五人は惡意の存在を知るものとして、地球を守るべく力を合わせることを誓い合つた。

そしてそれぞれの道を進んだ彼らが、何年か後に一流の人物となつて再会したところで話は終わつていて。

僕と篤史兄さんは後番組紹介が流れている前で膝つき合わせていた。

「ハッピーエンド、ですよね」

「ハッピー、なんぢやないか」

問題は別のところにあつた。

「それより、ナナつぽいよな、あいつ」

「肯定したくありませんが、否定はしません」

無茶苦茶女の子っぽく描写されている。

「なんとなく、どこかで聞いたような話だよな」

「ええ。細かい話は全然違いますが、ニュアンス的に」

「説得シーンとか特にな」

実際にいやな感じだ。

「これつくつたの、先週の事件より後つてことはないですよね？」

「どんなに遅れてたとしても、少なくともシナリオに関してはありえんだろ」

あははは。

篤史兄さんの乾いた笑い。僕もきっと同じような顔をしている

4 / 16 月曜日

事だろう。

「さおりさんにだけは、絶対逆らうのやめときます」

「そうしろ。俺もそうする」

不発弾の爆発による損害の復旧は着々と進んでいた。今はまだ遠回りしなきやならないが、来月にはもとの通学路に戻れるだろう。

でも僕にとつてはむしろ遠回りの方がよかつた。

【ふう。結構きついね】

【情けないわね、ナナ。こんな坂で息が上がるなんて】

詩紀ちゃんが腕組みして言うと、容姿もあいまつて結構迫力がある。

【ほら、仕方ないから手を引いてあげるわよ】

【つたく、公道で恥ずかしげもなく】

【篤史さん達には人のこと言えませんよ】

【なんと、ご機嫌な結香さんを肩車してたり。】

【おまえらと違つてやましい気持ちはこれっぽっちもない】

【私にもありませんからっ！】

この神がかつたような完璧で冷静沈着な、でも時々迂闊で意地張りで恥ずかしがり屋の少女と少しでも長く並んで歩ける事を喜び。

そのチャンスをつくつてくれた鬼、樞にも、少しだけ感謝を捧げたのであつた。

「グレイト」

不明瞭な発音でも「ご」と英単語を発しているが、きっとなにかのネタなんだろう。無視しておく。

「篤史兄さんにもさおりさんにも、よくそんなに落ち着いてられますね。詩紀ちゃんみたいに悩んだ事はないんですか?」

「それは!」

「深刻になつても始まらないもの」

「それは!」

「あるがままを認める自由さ。いわゆる観自在心つてやつ。鬼とつきあつていくにはしなやかさが大切なよ」

言葉だけ聞いてると、悟りを開いた、とでも言わんばかりだけど。本人を見ていると無神経との差は紙一重な気がする。

「それはあつっ!」

篤史兄さんはなぜか次第に甲高い声になつていき、「やかましい」

さおりさんの捻りの入った掌打に吹っ飛ばされた。

「姉貴い、もうだめだあ!」

適当。ノリ。棚上げ。それはそれ、これはこれ。だからこんな人達になるんだな。

「きっとみんな騙されてたんだね」

そして、彼はたやすく推理してのける。

本日放送のチカリカ5最終回。仮面をとつた二人の敵は、なんとチカリカそつくりだった。彼女たちは宇宙人に救われた本物の千佳穂と理佳穂を名乗り、

少年は死にかけていた千佳穂や理佳穂の意識をコピーして人間の真似をしている宇宙人に過ぎないと断じた。

自分が本当に千佳穂や理佳穂なのか、それとも自己の存在に悩んで戦いに集中できない二人。しかし、その恐怖心はもう二人のチカリカにも伝染する。

どちらかの記憶が間違っている。あるいは、どちらもコピーに過ぎないかも知れない。

四人は一端休戦することとし、まずは眞実を突き止めること。そして偽物の方が消える事を約束しあつた。

そして、近くに住む幼なじみにの男の子に自分たちの正体を明かし、これまでの経緯を語つて判定を委ねる。

「やっぱりあれは千佳穂と理佳穂だったのか」

少年は気づいていた。

「きっとみんな騙されてたんだね」

そして、彼はたやすく推理してのける。

宇宙人達は仲間の罪の減免と引き替えに逃亡した犯罪者の追跡を要求され、互いに相手を逃亡者と勘違いするような命令を与えられて地球へと送り込まれ、つぶし合いを演じることを期待されていたのであろうことを。

そんなのはもうどうでもいいことだ。と、二組のチカリカは、少年に判決を迫る。

「二人とも千佳穂、二人とも理佳穂だよ。僕には区別がつかないし、区別をつける意味もないと思う」

口々に苦情を言う四人に、少年はひょうひょうとしたもの。

「君たちはそれぞれ別々の存在なんだから。双子が四つ子になつただけでしょ? どっちがどつちのコピーなんて、些細な話だ

えば前述の通りであり……。」

その後昼も結香さんのサンドイッチですまし、夕方までぶつ通して全二十四話マラソンとあいなつたのだが、肉体的に精神的な疲労が大きい。子供向けにこんな痛々しい作品を作ってしまふ人たちはどういう脳みそをしてるんだろう。

「明日の午後はチカリカ5いくぞ。もうすぐ最終回なんだから、新学期前に一気に放送まで追いつくからな」

うわ。

「覚悟しときます」

「ああ、確かに結構覚悟いる。俺も一人じやちょっと見る気になれん」

いつも由香さんと一緒に見てるわけね。

「……ごちそうさまです」

「ごちそうさまついでに晩飯も食つてけよ」

「食べてつてね」

#### 4/4 水曜日

#### 4/13 金曜日

と篤史兄さんは苦笑する。

「身につまされるよなあ」

「……Bパート行くか」

後半のパートでは、千佳穂と理佳穂は双子の小学生で家業はホーミセセンターであること。エイリアン同士の戦闘に巻き込まれ重傷を負つたが、彼らと同化する事で命を取り留めしたこと。地球に逃げ込んだエイリアンの逃亡犯罪者達を追跡し、倒し尽くす使命を受け継いだという説明がなされていた。

ここらへんの設定自体はわりにありふれたものだが、中身といえば前述の通りであり……。

その後昼も結香さんのサンドイッチですまし、夕方までぶつ通して全二十四話マラソンとあいなつたのだが、肉体的に精神的な疲労が大きい。子供向けにこんな痛々しい作品を作ってしまふ

う人たちはどういう脳みそをしてるんだろう。

「明日の午後はチカリカ5いくぞ。もうすぐ最終回なんだから、新学期前に一気に放送まで追いつくからな」

うわ。

彼女らが飽きるまで、玄関先でたっぷり五分は拘束されていた。

「今日はつきあって」

彼女らが飽きるまで、玄関先でたっぷり五分は拘束されていた。

「今日はつきあって」

彼女らが飽きるまで、玄関先でたっぷり五分は拘束されていた。

「昨日は篤史兄ちゃんたちと一緒に来ました」

「今日はつきあって」

彼女らが飽きるまで、玄関先でたっぷり五分は拘束されていた。

そこで、口数が少なくおとなしそうに見える撫菜が意外とアクティブな事に驚かされる。単純な腕力では鈴菜に一步譲るが、読みの正確さや動きの精密さで言えば上回つてゐるものも知れない。

ことに、このボーリングという競技は撫菜向けだったようで、第一ゲームは姉妹揃つて二百点台後半をマークしていた。遠近感



はそんなものはないかもしれない、という気持ちの悪い話だった。

「彼女は並列多連精魂って呼んでたけれど、要は複数の魂が一つの肉体と連携している状態。詩紀ちゃんはいわば二連精魂ね。ちなみに私はあえてセカンドコアを区別する必要があるときには、

樞の名代としての彼女を詩紀ちゃん、人としての彼女を美紀ちゃんって呼んでる」

「なるほど。他に鬼が居るのなら、残ったこつちは自分。他に自分が居るのなら、こつちは鬼。そんな感じで役割分担が決まったんだろうな」

篤史さんが上手いことまとめてくれた。しかし理屈はさておいても。

「何故に『みのり』ですか？」

「そこはそれ、お約束だから。まあ、漢字は『美しい』をあててるつもりだけね。鬼が入ってるのもどうかと思うでしょ」

「うわ」

「そりや冗談にならんわな」

篤史兄さんと十悟さんだけが頷いてるところをみると、どうやらなんかまたマニアックなことを言っているようです。

「じゃあ、樞なんて鬼が憑いたせいでその、デュアルコアになっちゃったんですか？」

とすれば、元凶はその鬼なわけけど。

「むしろ逆でしょ。斗流の始祖は双子の巫女だったそうよ。そしてなきや、いくら相手が休眠状態とはいえる人の身で九頭竜なんて降ろせるはずもない。斗流の歴史上、樞を使ったのはこれまで始祖だけだったんだから、二つの魂は条件であつて結果じやないと思わよ」

と、さおりさんは言う。

「北落師門を扱えるのが私たちだけというのと同じようなものですか」

初さんが挙手して発言。

「おそらくね。それを考へると、天才的才能を秘めた六つ子とか八つ子、みたいななら、鬼どころか名のある『外側の神』でも降ろせるかも知れないとか思つたりもするけどね」

それがどんなものかは知らないが、どれほど危険なことかは想像がつく。

「まあ、実際にそんなの居たら即排除よ。人類全体の命運に影響しかねないから」

さおりさんは冗談めかして言うが、仲間であつても危険すぎるなら排除する、とそういう宣言したようなものだ。

皆同じように感じたのだろう。しばし会話がとぎれるが、「まあなんだ。さおり姉に目をつけられないよう気をつけないといけないわけだ。詩紀の中の人も大変だな」

「中の人なんかいない」

新川兄妹の掛け合いで、空気がちょっと和んだ。篤史兄さんはこういうフォローもできる。かき回す方が多いけど。「それにもしもの時はナナが守ってくれるわ。ナナは私にぞつこんだもの」

ああ、つまり今は美紀ちゃんの方か。

そんなに恥ずかしがるなら言わなきゃいいのに。

詩紀ちゃんの時だと、そういう事言いたいとは思わないわけかな。

「何を？」

篤史兄さんはリモコンで再生を一時停止すると、こちらに向き直った。膝の上に結香さんが乗つてなければ、真剣に話を聞く体制に見えなくもない。

「いや、そんな真面目な話じゃないんですけど。ただ、撫菜と鈴菜ってなんかチカリカっぽいなあって。髪型とか、イメージとか。

りかぼーの網膜投影ディスプレイ（スカラーラーミティヤフ）と撫菜の眼帯とかかぶりますよね」

「逆よ逆」

予想外の方向からの声。

「七瀬姉妹の方がオリジナルなもの」

振り向くと、ボブカットにファッシュングラス、パンツスーツのお姉さんが腕組みして仁王立ちしていた。

これは新川さおりさん。篤史兄さんや詩紀嬢の従姉に当たる人。ハーフだそうだが見た目はまるきり日本人で、詩紀嬢の方が遙かに外国人ぽい容姿だったり。

いつの間に襖を開けて入ってきたのか全然分からなかつた。が、それを考へても無駄だと言うことはよく分かっている。なにせ相手はさおりさんなのだ。年に一度と会わなくとも、この人の規格外つぶりは痛感している。

「や、ナナちゃん。おひさ」

ウインク。この辺は帰国子女っぽい。

「お久しぶりです。それはともかく、今聞き捨てならない事を」

「感動の再会をさらっと流したわね。はい、これ」

「うおつと」

さおりさんはちょっと不満げ。

渡されたでかい紙袋の中身は教科書類だった。さおりさんがいかにも軽々持つてたので重さを読み違い、あやうく足の上に落としかけた。

「さおり姉、勝手に入つてくるなよ」

「私は管理人よ」

「いや、管理人でもまざいだろ」

「うーん、管理人さんつて言えばすごい美人の未亡人がお約束だが。ほれナナ、差し入れ」

こちらは重ねた紙箱。中身は10インチのピザ三枚だった。

「わざわざすいません、ジュウ兄さん」

入ってくるやいなやかみ合わない事を言い出した、ひょろりと背の高いこちらは陸奥十悟さん。さおりさんと同じ歳で、彼女が日本にいる間は影のようにつき添つてはお目付役をつとめていた人だ。温厚そうに見えるがこれで意外とノリノリで、結構一緒になつて暴走していたので人選としては微妙なのかもしれない。

この二人、今では揃つて紫城高等部の教師の職にあるとのこと。五号室に五ヶ瀬が入つていよいよどこそそのアパート化してきたしな

「いやそれ、かなり古いから」

古い特撮を歌つてた人の台詞とは思えない。

「十悟、私が美人じゃないって言つてる?」

「未亡人じゃないと言つたんだ。別に他意はない」

「そんなに未亡人が良ければ、籍入れてすぐに葬式挙げてあげましょうか?」

と、さおりさんは腰を落として蠍螂拳の構えをとつてみせる。

「謹んで遠慮させていただきます」

「ジュウ兄さんでなくとも引くよなあ。

「これ、美人でキボウジンで管理人見習いみたいもん」

今度は、篤史兄さんが結香さんを指さして訳の分からないこと

を言い出す。流れからすると何かの冗談なのだろうが。

「うわ」

ジュウ兄さんが引きつった笑みを浮かべる一方、さおりさんは膝を打って笑う。

「あはは、そりやいわ」

「お上手だね、篤史ちゃん」

「だろ?」

「……だから誰が上手いこと言えと」

上手いのだろうか。僕にはいまいち意味が分からない。凄い

美人になる希望があるってことかな?

一部にはあまりウケなかつたようだが。

「深入りするな。俺にも聞くな」

解説希望で視線を送っていると、ジュウ兄さんに釘を刺されてしまつた。

「了解」

ずっと年上の十悟さんはあの頃は僕らとは少し距離を置いていたものだが、今になってみれば僕らをいつも見守ついてくれたと思うし、彼の忠告に逆らつてもあまり愉快な事にはならなかつた。気にならないと言えば嘘だが、今回もそれに従う事にしよう。

「話戻していいですか? さおりさん」

「ああ、七瀬姉妹の話ね」

「おともなげに 言つた。

「モデルなのよ」

「はい?」

「だから、鈴菜が千佳穂、撫菜が理佳穂のモデル」

「はあ?」

篤史兄さんも首をかしげている。

「飲み込み悪いわね、あなたたち」

不満そうな口調とは裏腹に、さおりさんの表情はしてやつたり

といった様子で。

「亀丸監督、友達だし」

こんなところに黒幕がいました。

かくして、ずいぶん人口密度の高いチカリカ鑑賞会になつてしまつた。

しかも教師二人が後ろで立ち見状態。

「僕、抜けましょうか?」

「ナナちゃんが抜けてどうするの?」

確かに結香さんの言うとおりです。

しかも監督のブレーンによる生コメントタリーつき。

「見た目と口だけのお調子者で、大学時代にはモックタートルと

か呼ばれてたのよ。プロデューサーの前で吹きまくつたら企画が通つちまたたどうしよう、って泣きついてきたから、思いつきを話してやつたってわけ」

「アメリカ帰りで医師免許持つてるとか聞いてたが、まさかそん

なところでつながつてるとか……」

コアなファンだけあって、篤史兄さんのショックは半端でなさそうだ。

「アメリカ帰りで医師免許持つてるとか聞いてたが、まさかそん

なところでつながつてるとか……」

コアなファンだけあって、篤史兄さんのショックは半端でなさ

そうだ。

いれば、人格の改变にも繋がるわ。結果としてあたかも本来の持ち主のようになるのは当然でしょうね

ナイス弁護です、さおりさん。

「ただ詩紀ちゃんの場合は、素の自分を鬼とは別に保てる要因があつたから、七夏君相手には本来の性格を出すことができたのよ

」

「また遠回しな言い方して。どういう意味だよ、そりや」と、十悟さんが急かす。

「そういうのに詳しい知り合いに診てもらつたことがあるんだけどね。私と同じ見立てだったわ。詩紀ちゃんは特殊な多重人格なのよ」

またややこしいことを言い出した。

「つまり、私は病気だということ?」

「病気とは違うわ。いわゆる解離性同一性障害との差異は、記憶

に途絶や混乱がなく、お互がそれぞれの存在を認識しあつてい

るつてこと。一人で複数の役を演じるのではなくて、別々の役者がシーンごとに交代しつつ同じ役を演じるような状態を想像して

もらうと近いかな

「わかるようなわからないような。なんでそんな奇っ怪な事にな

るんだ」

「わたし、わかりません」

結香さん、あきらめるの早いな。考へる事は篤史さんに任せきつてゐる感じ。

「単純よ。七夏君には魂と量子論的確率の偏りの話をした筈よね」

「脳単独での思考は偶然に支配されるけど、意思を持った魂が関

与する事で初めて方向性が与えられる、って話ですね」

自分の意思で選んで行動していると思ふこんでいるだけで、実

65

36

ばたん。

案の定。ドアが開き、七瀬姉妹が姿をあらわす。

「こんにちは。おはようからおやすみまで、ナナちゃんの暮らしを見つめ続けるリンリンです」

それはストーカーといいます、鈴菜さん。

「この目ではつきりと」

右目を指さしてみせる撫菜。黄金色の虹彩と縦長の瞳孔は、明

らかに人のものじゃない。

「……でも酔った」

想像するに左右の視力に差がありすぎるんだろうな。

詩紀ちゃんはすでに僕から飛び離れている。

「今のは、そう、感謝の気持ちを表現しただけ。別に他意はないわ」

「そう来たか！」

「ナナが私をどう思ってようと、私の方からは何も言つてはいな

いから」

可愛いなあこの人。

ぞろぞろ。

二人に統いて、満足げな篤史兄さん。ここにこ笑顔の結香さん

が屋上に上がってくる。

申し訳なさそうな宮藤姉妹。

にやにや笑いの十悟さん。

最後に出てきたさおりさんの表情を見たとき、突っ込まずにはいられなかつた。

「近くにいたんなら手かしてくださいよ！」

「愛しい七夏君の気持ちを試したくて、あわよくば自分のために

頑張る活躍が見たくて魚人を喚んだんでしょう？ 期待を無碍にはできないわよ」

「……別に期待なんてしてなかつたわ」

そういうの無駄な抵抗な気がするよ。しかも墓穴掘つてるし。  
「誰も詩紀ちゃんの事だって言つてないけど？」

「うー」

あー、ほんと可愛いなあもう。

「(・△・)ジサクジエーン」

意外と乙女チックなところもあるんだな

男性陣はわりと好きなこと言つてている。

「むー」

「別に非難するつもりはないわよ。結果オーライだし」とさおりさんは言つてたけど、きっと企んでたに違いない。

証拠はないけど、結局この人の掌で踊らされてた気がする。

ついでに実戦トレーニングで経験値稼ぎ、あと増えすぎた魚人の間引きもできて一石三鳥ってところね

初さん達はレベル十個ぐらい一気に上がつたんじゃないかな。

ファンファーレ鳴りっぱなしな感じで。

「しつかしナナよ、詩紀が正気だつてよく分かつたな」

十悟さんに肩を叩かれた。

「初さん達のアレをみてたから気づけたんですよ。力の一端を借りただけでああなんだから、本物の鬼の頭領が顕現してて、個人レベルの生死や怪我程度ですむはずがないでしょ？」

「さすが七夏くん。いい勘して。確かに樞<sup>くじ</sup>は休眠中。もしあれが起きてたら詩紀ちゃんをどうこうする程度じやすんでないわね。何かできるとしたら、『北落師門』を暴走させるぐらいしかし

「あいつ、雰囲気を盛り上げて引っ張つてく能力はあるからね。ネタさえ与えてやればいい仕事をするだろうつてのは分かつてたわ」

「つまり、事実上はこいつの作品のことだよ」

あまり嬉しくなさそうなジュウ兄さん。

「つてことは、もしかして敵方の二人もモデルいる？」

「いるけど今は秘密」

「やっぱり」

「じきナナちゃんも出てくるから楽しみにしてなさい」「うわあ」

「何よその顔」

とっても複雑な気分です。

どう扱われてるのかだいたい検討つくから。

昨日から同じ作品をぶつ続け。食事の時間も惜しんでピザつつきながら。しかも頻繁に一時停止しては細かい解説が入るものだから、今日も午後全部つぶした事になる。

確かに面白かったけど。

「よし、それじゃあ二次創作もいくか」

「へ？」

篤史兄さんが段ボール箱を持ってきた。

「これとかお勧めだぞ。作者のヘンプコードさんってリア中らしこれど、構成も画力も相当のもんだ。何より複雑で悪趣味な設定

にがつりと食らいついてきて、それを消化・再構成できているのが凄い」

渡された薄い冊子はいわゆる同人誌だろう。

「へえ」

生き生きとしたちかぼーの一枚絵は鋭く繊細な描線で表現され、それだけでも非凡な画才を示していた。表紙の端にはデフォルメされた竜のマスコットキャラクターと、スタジオヒナpressentsの文字が記されている。

「でも、中学生が理解できて褒められる子供向けアニメって一体

「あの娘は特別。詩紀ちゃんと同じ」

「うわ、中学生でも分からぬの前提ですか……詩紀嬢と同じ？」

「え、そなん?」

意外そうに、篤史兄さん。そして十悟兄さんもまた、意外なほど真剣な目でさおりさんを見た。

「俺も初耳だぞ。あんなん他にもいるってのか？」

「厳密には違うけどね。詩紀ちゃんは『集めて』『届けられる』けど、彼女は相棒に望まれて『そこにいる』んだから」

「お前さんは、まあたはぐらかすようなことを」

ジュウ兄さんはため息をつき、篤史兄さんの表情も懐疑的になる。

それに応えるように、さおりさんは何故か上機嫌に微笑んだ。

「ご先祖が珠坂という結界と七つの一族の血と北斗の鬼の力をそろえてようやく不完全になしえたっていうのに、個人の意思の力だけでちょいちょいと世界を書き換えてしまえるようなバケモノつてのがいるってこと。そういうのが集まつてくるのも、ご先祖が描いた青写真には含まれていたのかもしれないけど」

いつも冷静沈着なさおりさんの口から、すらすらと電波チックな言葉が紡ぎ出される。

突然のらしからぬ奇行に、二人のお兄さん達はさぞや引いてるかと思ひきや。

「……ここで言うか？ よりによつてナナに？」

「あーあ、俺も知らなかつた秘中の秘までぶつちやけちまつて」

意外にも、困惑はあつても否定はなかつた。

「はぐらかすなつて言つたのはあんたでしよう」

あくまでも得意げなさおりさんは悪びれた様子はない。

「態度の一貫しない奴だな。遠ざけておきたいのか引っ張り込みたいのかどつちだよ」

「外部から干渉を避けただけ。決めるのは七夏君だからね。私はそれを尊重して判断材料だけ提供するわ」

細かいことはよくわからないが、ここにいる僕以外の人たちは、どうやら本気でそれを信じているらしいという事だけはわかつた。

とまどう僕にさおりさんはにっこり笑つて見せ、

「それこそ生死に関わる話だし。何も知らずに死にたくないでしょ？ 七夏君」

と物騒な台詞を宣わつた。

知つても死にたくありません。

その後も続いたさおりさんの電波話によれば、

珠坂は『神』の、正確には『救世主』の能力を模した街なのだそうだ。

人の魂ごときがなせる事はたかがしれている。自己の脳内におまづつた。

とりあえず銃など抜いてみる。

小型拳銃二丁。武器はこれだけ。  
これが本物の『FreeweZ』なら魚人の鱗を貫通できるかもしけないが、プラスチック弾しか撃てないモデルガンでは、目つぶしをくらわすのが関の山だろう（ボラみたいなまぶたがあつたらアウトだ）。

しかし、彼らが銃を知つてゐるなら、手にしているだけで牽制ぐらいにはなるかもしねない。

詩紀ちゃんは僕に抱きついたたま、身をもつてかばうようにしてくれてゐる。

「喚んでおいて殺すなんて、これは本当に私の罪ね。でもナナを失うわけにはいかないから」

「え？」

「ナナは知つてゐるはずよ、『珠口』の使い方」

詩紀ちゃんの言葉によつて引き出されるように、浮かんだ歌は柿本人麻呂。

大君は神にしませば天雲の」

前に一発。左右に一発ずつ。

ける量子論的確率に偏りを生じさせる事で、魂の望む方向性を思考・行動に反映させる程度だ。

しかし、『救世主』は人々の信仰を集めるハブとして働くことで魂を群体化して一つの回路となし、より強力に世界へと干渉するため、個人に比べて遙かに広範に、強引に、偶然の偏りを生じさせる事ができる。

その『救世主』を人工的に作りだそと考へた者達がおり、僕ら斗流十家の祖となつた。

ある斎王と北面の侍の一派は、信仰の核となる存在とそれを守る存在達を用意し、日本の要とすべく靈的に適した優れた土地に町を興し、術式を敷いた。

という事なのだが……

またなんと電波な。

現在の宗家は詩紀ちゃんよ。表向きの仕事は私が肩代わりしてゐるけど、眞の支配者は彼女

その言葉が本当なら、詩紀嬢に頼めば何でも願いが叶うとでもいうのだろうか。

『救世主』つてことだから、要是キリストの奇跡みたいなのだろう。もしや、オザキ歌つたらガラスが割れたとかいうのもそれか？

確かに、昔から彼女が出した話題が直後に現実になつた例は枚挙にいとまがない。

いやいや、そりやいくら何でもこじつけすぎだらう。偶然だよ偶然。

でもさおりさんは、『偶然を偏らせる』って言つたよな。

起ころのが偶然でも起こりうる内容ばかりじゃあ、彼女が関係してゐなんて証明しようがなんないんじゃ。

「はあ、今度こそおわったよ」

「ほんとうにありがとう、ナナ」

顔を赤らめた彼女は初めて見る。

あの無愛想だった詩紀ちゃんが、心の枷を外したことでこんなに愛らしく笑う事ができるようになつたのだから。

身体張つて頑張つてよかっただと思えた。

あたりは焼き魚とオゾン臭が入り交じつたような臭いに包まれており、篤史兄さんの衝の時もこんなだつたんだろうが、この際どうでもいい。こうしてだきしめてると詩紀ちゃんはいい匂いがするし。

「雷の上にいほらせるかも」

ぱちん。ぱちん。ぱちん。

歌に応えて僕らを包み込んだ電光の殻は都合三度光り、十体あ

まりいた魚人をことごとく打ち倒した。

そして肩越しに後ろに一発。

弾で六芒星を描く。

「雷の上にいほらせるかも」

ぱちん。ぱちん。ぱちん。

歌に応えて僕らを包み込んだ電光の殻は都合三度光り、十体あ

まりいた魚人をことごとく打ち倒した。

「ひゅーひゅー！ ナナちん、しのりん、おしやわせに！」

「熱烈告白」

しまつた！

携帯の回線開きっぱなしだつた

このネタで一生からかわれ続けそうだ。

あれ？ 今、肉声も一緒に聞こえてこなかつた？

さすがに結香さんだけは売約済みだけど  
「はぐらかさないで！」

「人と価値観の違う鬼は、人とともに生きていけない。あなたに鬼が愛せて？ 運命をかき回しては大切な人を何人も奪い傷つけておいて、涼しい顔でいられるような生き物を、ナナは愛せるというの？」

何かがおかしかった。

僕はさつきから何をしてる？

誰に必死で話しかけてるんだ？

相手は非情な鬼の頭領、樞だつてのに。詩紀ちゃんの意思なん

てなくなってる筈なのに。

僕はどうして、詩紀ちゃんに対するように話してるのか。

……  
ああ、そうか。

僕にはどうに分かってたんだ。

「愛せないよ。そんなものを好きになるわけない」

「なら……」

それ以上、自己否定の言葉を話させたくはなかった。

「だから、僕がこんなに好きになつた相手が鬼の筈がない！」

「本物の鬼なら、なんと思われようと意に介さないだろ。僕の気持ちにそんなにこだわる君は人なんだ。自分を樞と思いこんでる

だけの詩紀さんだ」

「……」

「こっちに来るんだ」

「そんなんのはナナの勝手な思いこみで理屈をこねてるだけ。何の

たとえば詩紀嬢に頼んで宝くじ十回連続で一等当たったとして、それが奇跡の証拠になるか？」

「おいおい、ナナのやつ悩みこんじまつたぞ」

「さおりが話をややこしくするからだ。せめてもう少し落ち着いてからにすれば」

「ここまで完璧に隠し通してきた挙げ句、証拠も無しに信じられる話じやないだろ」

「篤史の言うとおりだ」

男性陣一人の突っ込みに、さおりさんは一ともなげに言った。  
「実演しよか？」

「そいつはカンベン！」

間髪を置かず、期せずして答えがハモる。

「論より証拠って言うわよ」

具体的に何をするのか分からぬが（指をコキコキ鳴らしているあたりがそこはかとなく気になる）、さおりさんはその実演とやらをやりたくて仕方ないらしい。

篤史・ジュウ兄さんがそれを歓迎していないのは言うまでもなく。実演とやらは見た。でも危ないのは困る。そして先輩方の様子を引くまでもなく、とても危険そうな雰囲気が。

妙な風に緊迫した雰囲気を破つたのは、のんびりほっこりした声だった。  
「実演もいいですけど」

篤史兄さんの膝の上で目を糸みたいにして大きなおせんべいをかじっていた結香さんは、のんきな口調で提案した。  
「今日はもう遅いからお開きにしたほうがよくないですか？ よ

「電波で」

証拠にもならないわ」

「ふう。強情な人だな。

「証拠はそちらの心の中にあるんだから僕が証明する必要なんて無い。だから素直に認めればいいんだ。君は意味も分からず誰かの望みに動かされただけなのに、叶えてしまつた惡意の結果を自分での罪として背負ってきたんだろう？ 悪意の主が良心の呵責から免れるのと引き替えにね。自分が鬼に支配されているって信じる事で、心の安定を保とうとしてもおかしくないよ」

「ナナは本当に残酷ね。それが好きな相手に言う言葉？ 自分を極悪非道の悪人だと認めろ、罪の意識におののきながら生きるなんて？」

「悪人？ そこがまず間違い」

彼女が怪訝そうな表情を浮かべた。

「詩紀さんに罪はないよ。能力をこえた責任を押しつけられたんだから、自分の意思で正しい選択も操作もできるわけないでしょ。バスの運転席に座らされた赤ん坊に事故の罪を問えると思う？」

「それじゃ、ナナは私を許してくれるっていうの？」

初めて見せた、泣き笑いのような表情。

「むしろ気に病ませて悪かったと思つてる。きっと撫葉や鉢葉も、同じだと思うよ」

両手を開き、呼びかける。

「だから来い！ 詩紀ちゃん！」

どすん。

次の瞬間、僕は大切な人の心地よい重さを胸に抱き留めていた。

さおりさんはちょっとと考えていたが、いかにも空気が読めてない発言だが、男性先輩達は渡りに船とばかり賛成する。

「今ゆつかがいいこと言つた！」

「そそう！ 僕たちも明日の準備終わつてないんだぞ。分かつてると納得してくれた。

よくある捨て台詞みたいに聞こえるが、さおりさん相手だと本当に情けをかけられた気がする。きっと勘違いじゃないんだろう。

そんな経緯でなんだか危なそうな事には巻き込まれずすんだが、詩紀嬢勇者様疑惑（女神様だつけ？）についてはうやむやになつたわけで。残念だったような、ホッとしたような。

「それじゃあなたたち、くれぐれも始業式に遅れないようにな」

「そうそう、明日から新しい学校で新学期なんだから。新学期？」

「あーっ！」

「なに？ 疑問なら明日にして。今日はもう飽きちゃつたから」

飽きたつて。

「そうじやなくて。電波話に振り回されて、結局荷物整理できなかつたじゃないですか！」

「言う言う」

「大丈夫じゃないのー? ねえ結香ちゃん」

「ええ、そう言うこともあろうかと」

結香さんが人差し指を立てて見せた。

「荷物整理なら初さん終さんにお願いしておいたから」

「はい?」

「午前のうちに合鍵預けておいたから、もうとっくに終わってると思うよ」

「え、えええええつ!」

すぐさま五号室に向かったが時すでに遅く。

宮藤姉妹はまさに撤収の真っ最中だった。

初 「七夏さま、お疲れ様です」

終 「早速で申し訳ありませんが、作業内容をご確認いただけませんでしょうか」

初 「至らぬところなどございましたらお叱りは甘んじて」

相変わらずのばか丁寧さと、おそろいのなぜかメイド服については突っ込まないでおくとして。

初 「居間を占拠していた段ボールの山は綺麗に消え去り、殺風景な部屋は完璧な居住空間に姿を変えていた。この人ら仕事できすぎ!

相変わらずのばか丁寧さと、おそろいのなぜかメイド服については突っ込まないでおくとして。

初 「至らぬところなどございましたらお叱りは甘んじて」

気が利くなあ。さすがに。

終 「ある種の娯楽メディアに関しては特に慎重に扱い、簡単には目につかないようカモフラージュ性も考慮しました。分類はジャンルと出演者ごとで実用性を重視しております」

「……」

そもそも丁寧な話し方の二人なのだが、一語一語をはつきりとくぎつてことさらゆっくり噛んで含めるような口調に、ただならぬ雰囲気を感じた。

ある種?

ある種で。

血の気が引く。

お隣さんの餓別。あの段ボールって、もしかして。

初 「シリーズの抜けやタマゾンのお薦め商品もリストアップ済みです。内訳はこちらにまとめてございますが、必要なら読み上げましょうか?」

二人とも態度がほとんど変わらないんですねが。

「い、いえ、そこまでしてもらわわけには」

終 「ご心配には及びません。七夏様のご趣味については心の内にとどめ、決して口外いたしませんのでご安心を」

この人らデリカシーな過ぎ!

てか、これ、もしかして嫌がらせ?

初 「ただ、老婆心ながら一言だけ言わせていただくと、お楽しみ

は想像の中だけにしておいていただきませんと、不名誉な罪状で手が後ろに回りかねません」

「そ、それはもう、十分に理解しております」

終 「そうですね、自制の如何によっては、七瀬のお嬢様方にも十

あの群れは全滅覚悟の高価な囮だったのか!

誰かが目的を果たせばいい。個々より群体としての発想、アリ

か蜂あたりのような発想だ。

「逃げろ! 詩紀さん!」

しかし。

僕の目の前で、彼女は進み出てひざまずいた魚人に手を差し出し、不器用な口づけを受けたのだつた。

彼女は魚人に狙われていたわけじゃない。

魚人は彼女を迎えるために、僕らから奪還に来た。彼女こそが魚人達の正当な支配者、彼らを従える者だから。

「人と相容れぬものは、それなりの場所に行くべきよ」

彼女が、おごそかに口を開く。

「彼らは私を喜んで迎えてくれる。二千五百余の同胞を見殺しつした事をさえ意に介さず、むしろ私のために滅びる事を名譽と思つてくれる」

「詩紀さん、僕らを捨てるの? 裏切るの?」

「そうよ。私は鬼だから」

彼女の表情はあるの笑みを貼り付けたままだ。

「お嫁さん候補なら、他を当たればより取り見取りよ。ベンベンもリンリンもナナが大好きだし。初さん終さんもいいわね。最初はとまどうかもしれないけれど、きっと光栄に思つてくれるわ。

そう言って振り向いた時。

彼女の背後に数体の魚人が迫っているのが見えた。

別働隊!?



るだろう。

「ナナ」

背後から声をかけられた。

「こんな時間に何をしているの？」

それはこちらの言葉です。

と言い返したかったのだが。

振り向いた途端眼前に飛び込んできた光景に魅入られてしま

い、声が出せなかつた。

全方位型ソフトクロスフィルタ常備ですかこの人は。

朝日を浴びてキラキラと輝く銀髪が、可愛いとか綺麗とか通り

越して、もう神々しいとしか言いようがない。相変わらずの仏頂

面さえ、神々しさの一役買っているように思える。

言わずとしれた、詩紀嬢であった。

「あ、ええと」

私は起きたいときに起きて、食べたいときに食べて、寝たいとき

に寝るの」

質問に先回りするよう、適切な答えが返ってきた。高校生として正しい答えではないところが何とも。

女神様じみた容姿に相応しい答えでないのは言うまでもないが、これでうまいこと気が抜けた。

「あ、あはは。置いてかれちゃって」

「兄さん達を基準にしていては遅刻してしまうわ。毎日全力ダッシュで競争だもの」

結香さん、坂ばっかりの2キロ弱を篤史兄さんについているのか。

その光景はちょっと想像しがたい。まさか篤史兄さんまで全力

この辺も含めてモデルなわけね。

撫菜が弾丸五発を撃ちきった直後。

マガジン交換の隙をカバーするかのように、ジュウ兄さんが進み出た。

すぱぱぱぱぱぱ。

氣の抜ける音とともに、敵最前列めがけてBB弾がまき散らされる。

もちろんそんなもので魚人どもにダメージが与えられる筈がないのだが、しかし彼らはなぜか、数歩と歩かないうちに次々と地に突っ伏していく。

新たな魚人がそれを踏み越えていっては弾をくらい、面白いぐらいいにばたばたと、折り重なるつて倒れる。

最初は催眠ガスでも詰めてあつたかとも思ったが、ふと先ほど

の漢詩が脳裏によみがえつてきて、ピンと来た。

なるほど。

『巻舌口』。十悟さんの得意よ』

「要するに舌先三寸の鬼なんだね、実にジュウ兄さんらしいな」

春眠暁を覚えず。

完徹に近かつたはずなのに、僕の眠気の方は吹き飛んでる。普

通この状況では寝られない。

プラスチック弾を媒介にして古代の詩人の言葉をぶつけられた結果として、彼らは戦闘の緊張感すら打ち消すほどの強烈な睡魔に襲われたのだ。微妙にせこい感もあるが、戦闘中に寝てしまう危険性については説明は不要だろう。

『牀前看月光 疑是地上霜 桂頭望山月 低頭思故郷』

という事はないと思うが、結香さんは本当に中身変わつてない感じだな。

「さあ、行くわよ」

そう宣言した詩紀嬢は無造作に僕の手首をつかむと、そのしなやかな指からは想像もつかない力でぐいぐいと引っ張り始めた。

「うわっとと」

私が最終ラインだから、離れないようになさい。初日から生徒指導の世話になりたくないけれど。

相変わらず無愛想だが、遅刻しないように気を遣つてくれているようだ。

「ええと、もしかして……待つてくれたんだ? ありがとう」

「別にあなたを待つてたわけではないから。偶然一緒になつただけ、勘違いしないで」

「へ?」

顔を赤らめてのあり得ない発言。おおよそ詩紀嬢らしからぬ態度。

これっていわゆるツンデレ系? (篤史兄さんの薰陶によりここ数日でえらい詳しくなりましたよ、ええ)

とか思つたりもしたけれど。

「……とでも言えば満足かしら」

と、一瞬で元の無愛想に戻つてしまい、先ほどまでの可愛しさは微塵もない。

ギャグか?

いや、ギャグなんだろなあ。彼女なりの。

とにかくとてつもなくレアなものを見てしまつたのは確かなので、なんとななく併んでしまつた。

ジュウ兄さんは今度は李白を吟ずる。  
すぱぱぱぱぱ。  
弾を食らった魚人はめいめい勝手に振り向いて、全体の動きに逆方向の流れ同士がぶつかりあって陣形をさら崩す。  
それでなくとも連携の微妙な魚人達であるというのに、撫菜の狙撃で現場指揮官を次々と倒されている状態では混乱からの回復は難しい。比較的統制のとれた一部についても鈴菜達がきつり押しどどめしており、今や魚人達の進軍は停止していた。

『よし、最後尾が上陸したそうだ。川まで一直線! 初・終、やつてしまえ!』

ジュウ兄さんの発破。

玄関口に並んで立つた宮藤姉妹はうなずきあうと、例の長手袋を脱ぎ去つた。

二人は向かい合つてダンスのような体勢で組み合い、校舎の方に向けて無いはずの手をのばし、手の形をした光り輝く何かをつなぎあう。

『はるか北の門にて永劫の時経てなお死ぬことなきものよ』

おごそかに、すずやかに。幼き出される呪文が綺麗なハーモニーをなす。

組み合つた手の周囲に無数のまばゆい輝きが生み出されてい

く。

『おつと、ここはやばい。逃げるぞゆつか』

ともに後衛をつとめる撫菜はといえば、膝撃ちと寝撃ちの間の  
ような姿勢で、大型ケースに半ば身体を預けるようにして構えて  
いる。

ケースの中身はやっぱり銃だつたようだけど、あの寸詰まりな  
フォルムとばかりかいブレーキと太い銃身は確か……お隣さんが  
言つてたやつだ。そう。

XM109ペイロードライフル。

また、なんというか。

対物用重狙撃銃とちびっこい撫菜との組み合わせとは、アンバ  
ランスにも程がある。

『ごー』

発砲。

一直線をなして十数体の魚人が倒れ、その背後の堀に穴が穿た  
れ、堀の向こうで爆発が起る。

?

あれって、徹甲榴弾？

「実銃!」

なんで?

いや、実銃で正しいのか。

むしろおかしいのはジュウ兄さんの方じやないか。

我ながら、怒濤の非常識展開に、まともな神経が麻痺してきて  
いるようだつた。

『?』

撫菜はしばし首をかしげていたが、

『しまつた』

それにも、あんな表情ができるとは。

見事な演技力だけど、それなら普段もうちょっと愛想良くなして  
もよさそうなもの。

これで近づきがたい感じさえ払拭されれば、さぞや人気が出る  
だろうに。

そう忠告しようと思つたが、やめておいた。モテモテの彼女が  
想像しがたいというものもあるが。そういう気分にはなれなかつた。  
激痛が走つた。

しかし、慣れているのだろうが実に悠々と歩いているのだ。

表情が乏しいこともあるが、急いでいる感が全く感じられない。

ちょっと心配になってきて、先行しようとしてみたら、手首に

思わず立ち止まり、彼女の隣に戻ると嘘のように痛みがなくな  
る。

あんまり力を入れているようには見えないが、詩紀嬢につかま  
れた手首は曲げもひねりも利かないようになつてしまつた。  
これじや前に出ることも下がることもできない。

てか、気づかないうちに関節極められて連行されていますよ。

ああ、こういうやり方、確かにさおりさんの従姉妹だ。血のつ  
ながりがなくともそつくり。

「イタっ!?」

思わず立ち止まり、彼女の隣に戻ると嘘のように痛みがなくな  
る。

あんまり力を入れているようには見えないが、詩紀嬢につかま  
れた手首は曲げもひねりも利かないようになつてしまつた。  
これじや前に出ることも下がることもできない。

てか、気づかないうちに関節極められて連行されていますよ。

ああ、こういうやり方、確かにさおりさんの従姉妹だ。血のつ  
ながりがなくともそつくり。

「あー、詩紀様だ」

後ろで声。

首をひねつてみると、同じ焦げ茶のブレザーの女生徒。

そう言つてひょいと眼帯をはずす。

そして今度は、右目で照準をあわせ、

『ごー』

先ほどに数倍する魚人が列をなして倒れていく。そして正門前  
通りのはるか彼方で、一回り大きな体躯の（おそらく指揮官クラ  
スの）魚人がザクロのように碎けたのが見えた。

『うん』

撫菜が満足げに頷く。

銃声のたび、一体の大型魚人と、射線上数十体の魚人達が戦列  
から取り除かれる。

本来生き物相手に使うような銃ではないから（事実上の携帯用  
半自動砲だし）無茶苦茶な破壊力には納得できる。

しかし、撫菜程度の体格でみんな大物の反動に振り回されて  
ないのはどういうわけだ。

さらに奇怪なのは、射手である撫菜からは見えていないはずの  
相手を、視線を遮る多数の敵ごしに狙撃してゐるということ。  
つまりは。

「あれも、そうなんだ？」

『弓矢』だそうよ。つまり弓矢ね

撫菜の失われた右目は、飛び道具を司るその鬼によつて肩代わ  
りされ、狙撃に特化した透視・千里眼を発揮するようになつて  
いるのだろう。とすれば、障害物の向こうの敵を倒しうるペイロ  
ドライフルは、彼女の能力を最大限に生かせる武器だと言つてい  
い。

しかし鈴菜といふ撫菜といい、容姿と戦い方のアンバランスさ  
が実にチカリカ的。今更ながらにそう感じてしまふ。

「いそげおソメ！ もうちよつと！」  
さらに後ろに声をかけている。

「ま、待つて！ ははは、待つてつたらー、うつきー！」

三十秒後。二人は僕らとほぼ並び、速度を落としていた。

「はあはあ、間に合つたよー。はははあ」

「もう、おソメが寝坊するからあ」

その後も、同じような様子で、何人かが合流してきた。

ネクタイの色からすると、皆二年生・三年生のようだ。

「なるほど」

自称のみならず、詩紀嬢は多くの学生達に最終ラインとして認  
知されているらしい。

しかし、合流したとは言つても一団にはならず、僕らとは少し  
距離を置いて固まつてゐる。

ひそひそひそ。

古い推理小説じやあるまいし。砒素がどうしたと言いたくなつ  
てくる。

「声を潜めて聞こえているわ。言いたいことははつきり口にし  
たら?」

強い口調ではなかつたが、詩紀嬢は良く通る声で誰相手ともな  
くそう口にした。

数秒間の沈黙の後。

「お、お似合いですよつ。詩紀サマ」

「ほんと、宝塚みたーいですつて」

おソメとうつきーと呼ばれていた女生徒二人が言う。

ここでどちらが男役なのか尋ねてみたい衝動に駆られてしま

う、そんな僕はどうすればよいのでしょうか。

それをきっかけに、他の生徒達も次々と発言をはじめる。

「珍しいですね、新川さんにお連れがいるの」

「見かけない顔だけど、転校生？」

「そちら、噂の婚約者さんですよね」

「はい？」

何ですかそれは？

婚約者？ そんなのいるの？

いや、篤史兄さんいるのだから、詩紀嬢にいてもおかしくない。

でも噂ぐらい聞きそうなもの。

いやいや、十家の内輪で誰も知らないはずがないと思うんだが。あ、これが噂か。

たらしい。

なんたる放任主義だろう。

「ナナは同じクラスだから。私と一緒にぐれたり振りをしていれば教師が案内してくれるわ」

なるほど、今日は荷物らしい荷物がないのでこういう芸当も可能なわけだ。

ほどなく、

「新川さん、2-Cはそっちよ」

女の先生に声をかけられた。

美人だけど可愛さの方がまさる容姿といい、ほんわり癒し系の雰囲気といい、十年かそこら後の結香さんが、きっとこんな感じに違いない。

もしかして親戚かも知れないな。

「ありがとうございます、野口教諭」

「ほら、君も。五ヶ瀬君だったわね。ちゃんと新川さんについて

「はい」

「慣れてても迷っちゃうこともあるんだもの。転入生じゃ当たり前よね」

なんかとつても自己弁護的に聞こえるんですが。

こうして、僕らを含めた最終登校グループは教室への移動時間を節約できた事になる。

まるでお話のようなご都合主義だ、と思つた。

式典での退屈な挨拶やごく短い伝達の後、僕らはそれぞれの教室へと向かった。

終さん、頭と顔をぬぐわれながら、鈴菜は双子の姉に無言で親指を立てて見せる。

『おつかれリンリン』

『攻撃再開まで三十秒ってところね。十分ひきつけて、あとはまた各自で上手いことやって』

そんなおおざっぱな指示を出すさおりさんに、誰も疑問を差し挟まない。無駄だと分かっているからだろう。

しかし半分非実体だった結香さんはともかく、普通に格闘戦をしながら返り血も浴びずにころつとしているさおりさんがつくづく恐ろしい。

前衛の四人が堀を離れて後衛の近くまで下がってきた事で抵抗はなくなつたはずだが、先ほどの電撃に対する警戒があるのだろうか。

門から入り込んできた魚人達は、隊列を組み横一列の前線を形成して、あたりを警戒しつゝくりと歩み寄つてきている。

『皆様、お見事でした』

『完璧な遅滞戦術です』

『戦術はともかく、生臭いの何のつて。魚屋のゴミバケツに頭から突つ込んだみたいだ』

『さすが篤史兄さん。冗談をとぼす余裕がある。』

そこに、初さんがバスタオルを手渡す。準備がいいというか、この状況でそんな事までよく気が回るものだ。

『鈴菜様、こちらに』

接着剤とか、目つぶしとか、そういうやつだ。

なんか急にせこくなつてきたなあ。そういう微妙なところが十悟さんらしい。

あれはきっと、篤史兄さんに教えてもらった“ちかぼーのバー”と同じような理屈なんだろ。不確定な武器は常に最適な武器に変わりうるし、不確定な構えからは常に最適な攻撃を繰り出せるということ。

結香さんは鬼使いなのかそれとも鬼憑きのかは知らないけど。そんなものに頼って自分を不安定にするなんて想像するだに

気持ち悪い。樞の言うのが本当なら 篤史兄さんあたりがちゃんと姿を覚えてくれるのを当てにしてるのかもしれないが、よっぽど相方を信頼していないとそうそうできる事じゃないだろ。

う。ほんと、いいコンビだと思う。

さて、さおりさんはといえば、時折堺を超えてくる魚人の始末に駆け回っているのだが。

「ふうん、姉さんは何も降ろしてないのね」

篤史兄さんが刀使ってさえ倒し切れないバケモノどもを手刀や蹴りで一撃必殺。

鈴菜や結香さんの魔術じみた戦いと比べても、ある意味むしろこっちの方が余計に非常識に感じてしまう。

ほんと、なんであんな真似が可能なんだろうか？

門では最初に張り切りすぎてへたつていた鈴菜が再加入。ごく短いサイクルでのローーテーションが成立し始めた。

信じがたいことに、たった四人でみんな群れを押し戻しはじめている。

『リンリンふつかーつ！』

門では最初に張り切りすぎてへたつっていた鈴菜が再加入。ごく短いサイクルでのローーテーションが成立し始めた。

ほんと、なんであんな真似が可能なんだろうか？

『うつひやあ、待避つ！』

篤史兄さんが地面に拳を打ち込んだのが見えた。

次の瞬間、引き倒された門扉を、堀を雷光が駆けめぐる。

おかしな色の煙があたりを覆い、蛙の断末魔のよう魚人の悲

後衛のみんなが何ができるのかは知らないけど、ここで一気に全員攻撃いでれば魚人達を潰走させられないだろ。それをさおりさんに伝えようとした時、さすらん。

甘かった。  
ずしん。

『気づかれたかな。そろそろ前線を下げましょうか』

狭い門は一齊には通れず、しかも少数で真っ向からぶつかるしかない。個々に堀を越えれば各個撃破される。

さおりさんはいきなり物量戦になることを防ぐために、あえて弱点を残してそこを攻めさせ、魚人軍団の消耗を図ったのだから。

これまで引っかかってくれていた彼らが、それに気づいて戦法を変更してきた。要するに堀がなければいいのだから。魚人達は一齊に体当たりをかけることで堀を押し倒しにかかってきたのだ。

ずしん。

「いけない！ 堀から離れて！」

もう数回の打撃で堀が倒されるだろう、そうすればいかに篤史兄さん達が強くとも、瀑布のような魚人の群れに巻き込まれ、押し流されてしまうだろう。

『どいてろ鈴菜、俺がやる！』

「あなたがやる！」

篤史兄さんは地面に拳を打ち込んだのが見えた。

次に瞬間、引き倒された門扉を、堀を雷光が駆けめぐる。

おかしな色の煙があたりを覆い、蛙の断末魔のよう魚人の悲

担任はなんとジュウ兄さんだった。当たりと言つていいだろ。何しろお隣の2-Bはさおりさんだそだだから。悪い人じやないんだけど、きっといろいろ大変だろ。主に精神的に。

まずはお約束の自己紹介となり、「新川詩紀。あとは何を言つても蛇足ね」ジュウ兄さんを含む全員が一齊に領いた。

皆さん初めまして。五ヶ瀬七夏、転入生です。得意科目は国語一般。苦手は芸術一般。あと男です、念のため

別にギャグのつもりはなかったのだが、最後のフレーズでクラスがどっと沸いた。  
そしてその直後の、  
「知つてゐる。今噂の、詩紀様の幼なじみで許嫁だよね」

一体どこからそんな話が出てきたかわからないが、僕が珠坂に来てから数日というのにこの状態。  
しかも詩紀嬢が否定せずに放置するから、僕がなんと言おうと恥ずかしがつてゐるだけと解釈されてしまい、もう完全に既成事実扱いだった。

尋問モードで聞まっている最中、その詩紀嬢が僕の耳元に口を寄せてささやいた。  
「話があるわ。放課後、北棟の屋上で。くれぐれもつけられないようになさい」  
詩紀さん。お願いですから余計に騒ぎを大きくするような真似をしないでください。

おかげでジュウ兄さんの手を借りても、全員撒くのにたっぷり寄せてささやいた。

七瀬姉妹の父親にドライブのコースを委ねられたとき。二人とその母親が海回りを推したのに対し、ただ一人山越えを宣言し主張し貫いて、事故現場へと導いたのは僕だった。  
「あなたにベンベン・リンリンを傷つけさせたのは私。二人の両親が亡くなつたのも、あなたが言葉を失つたのも、みんな私の」

「わけわかんないよ、君の言うこと」

僕は詩紀嬢の言葉を遮った。

弁護してくれたのは嬉しいけど、僕の逃げを肯定するような言葉をこれ以上聞くに堪えなかった。

「道を決めたのは僕だ。だから僕が悪い。それでどうして君が出てくるのさ」

彼女に罪をかぶせて何になる？ それでは罪を償えるどころか、罪悪感が薄れる事さえない。

説明するにはちょっと長い話になるわ。ナナらしからず興奮しているけれど、落ち着いて聞けるかしら？」

早速釘を刺された。

彼女は真剣に見える。納得させる説明ができる、と彼女は考えているのだろう。

ならば。

「聞くよ」

詩紀嬢は頷いてみせた。

「私、『樞』もそうだけれど、末位に近い宮藤の『師門』は、斗流の一部には衝撃だったようね。斗流全体としては望むべくもない奇跡だけれど、我が一族の子には何故に血が出ないのか、と思う人々が居ても不思議ではないわ」

「……ええと？ まったく、全然、これっぽっちも意味が分からぬのですぐ」

新川は電波一族でしょうか？

「初さん終さんの長手袋は何か知っているかしら？」

突然話の方向が変わった。

「確かに、火傷か何かの痕があるとか」

「ナナにはそう説明されてるのね」

「実際には違うと？」

詩紀嬢は頷く。

「何もないのよ」

「え？」

「無いの。二人はもともと繋がって生まれてきて、初さんの左手、終さんの右手になる部分は最初から足りなかつたのだそうよ」

それは、初めて聞いた。

でも、僕らの前で手袋を脱いた事がないのも頷ける。

「じゃあ、あれは義手なんだ」

嘘みたいに精巧な。

近頃では神経や筋肉の電位を読み取って動く電動の義手があるという話は聞いたことがある。

実際、二人の手の動きは実になめらかで生活に困っている様子はなく、ただ手袋をはめているだけにしか見えない。

「そうね、ある一面ではそう言つてもいいものかもしれないけれど、本質は別だわ」

詩紀嬢の肯定は歯切れが悪い。

「斗流の優れた術者は自らの身体に鬼を降ろしてその能力を使用する事ができる。さおり姉さんが『揺』のかわりに『磯』を降ろすように自由にはいかないけれど、結びつきはずつと強く制御うにね」

そしてやっぱりすぐ電波方向に。

また『鬼』だ。

「でも宮藤姉妹は例外。二人は手の形をとった『師門』の一部と常に繋がっている。あれは身体欠損部を介した専属契約のようなもの。さおり姉さんが状況によつて『揺』のかわりに『磯』を降ろすように自由にはいかないけれど、結びつきはずつと強く制御

いういう仕事にはうつてつけということね」

ただ冷静に分析する樞に、ちょっとといらつと来る。

「あんたのお仲間同士がああして殺し合つてゐるのに、よくもそんな」

「私にそういう感覚は無いと言つたはずだけれど」

つい忘れてしまい、どうしてもヒト相手のように会話してしまふ。

なまじ詩紀嬢の姿をしているから。

やられててもやられても仲間の死体を踏み越えて突き進んでくる魚人の群れに、さすがの鈴菜もじわじわと押され始めていた。

『リンリンつかれた。交代希望』

『よし、任せろ』

鈴菜に代わって、篤史兄さんが前に出る。

同時に襲いかかられる数を制限して、ローテーションで休息をとりつつ敵を押しとどめる。これができるように、校門を絞り込みに使つたのだろう。

篤史兄さんの戦い方はしごく真っ当だった。  
魚人の爪をかわし、あるいは刀で弾き。斬撃をたたき込む。

さすが篤史兄さんは剣術体術ともに半端ない。鈴菜のようないいが、巧みに攻撃を回避しながら、最小限必殺問答無用ではないが、巧みに攻撃を回避しながら、最小限の斬撃で確実に魚人を無力化していく。

が、たつた一人自分の身を守りながらでは、あれだけの群れに対する攻撃力としては到底十分とは言えない。門を維持しきれず、次第に押し込まれてくる。いかに腕が立つても一人ではとらえきれない魚人が、脇からすり抜けて門内に入り込みはじめる。

ケモノ魚を彷彿させる。

心臓がばくんばくんと暴れ、血の流れる音が両耳からざあざあと響いてくる。

あのいかにも固そうな鱗に刀なんて通じるんだろうか。

篤史兄さんやさおりさんはああ言うが、少なくとも僕の目には無策にしか見えない。

達人のさおりさんはともかくとして、結香さんや鈴菜が武器らしい武器も持たずにはそんな連中の群れと対峙しているのだ。愛らしい顔が一瞬で食いちぎられ、頭を失った胴体がどうと倒れて魚人の群れの中に消えていく姿が容易く想像できてしまう。

距離を詰めてくる魚人どもを見ていると、ペたり、ペたりとう足音まで聞こえてくるように感じられる。

自分のところまではまだまだ距離があるというのに。一步一歩、鈴菜達に迫る様子を見ているだけでも気絶してしまいそうだ。

「なんで、なんで逃げないの!?」

ついに先頭の魚人の水かきのある手が門扉にかかり、そして容易く引きちぎった。

たちまち十体にあまる魚人が敷地内に入り込む。

「逃げてよっ！ 鈴菜っ！」

『ここはリンリンにおまかせだよ、お兄ちゃん！』

真正面に立っていた鈴菜は右腕をぐるぐる振り回しながら魚人達の前へと駆け出し、

ぱぐしゃつ。

木刀で割られた西瓜のように頭が碎けた。

ただし、先頭の魚人の頭の方がだ。

ちっこい拳の、いかにも素人じみた大振りパンチが、大物マグ

ロなみの頭蓋を完膚無きまでに粉碎したのだ。

筋骨隆々の大男が、大鉈か斧でも殴りつけたような破壊力。あまりにもあまりな光景に、僕の思考と同じく、後続の魚人達

の足も止まる。

『おまえはもう、死んでいるう♪』

頭の無くなつた魚男の死体をびしょと指さして精一杯の低い声で脳天気に宣言する鈴菜は、相変わらずのちびっ子で。

『七瀬鈴菜、ジャンジャンバリバリいつきまーす！』

鈴菜は群れの中に飛び込み、暴れに暴れ始めた。

『あたたたたたたたたたた！』

型なんてない。映画館から出てきた子供がカンフーの真似をして手足を振り回しているのと大差ないといふのに。当たるを幸い魚人をなぎ倒していく。

当然攻撃を試みる魚人もある。だが、鉤爪でかすめただけでも、しかけた魚人の腕が弾け飛ぶのだ。それこそ突進するダンプ

カーに、いや、高速回転するスクリューにでも殴りかかったかのよう。

魚人をなぎ倒していく。

『さおり姉さんは『斧鉄』って呼んでたわ』

そう言つたのは詩紀嬢、いや、『樞』か。

斧鉄。つまり、斧とまさかり。そういう名前を与えられた鬼なのだろう。

二人が回復した事を喜んでばかりいたけれど、『血が出た』つてのは鬼の力が使えるって事でもあるんだ。

『斧鉄』は武器であると同時に討伐の権限を意味するから。このだらう。

「な、何なの、あれ？」

『さおり姉さんは『斧鉄』って呼んでたわ』

てのは鬼の力が使えるって事でもあるんだ。

『斧鉄』は武器であると同時に討伐の権限を意味するから。このだらう。

も容易。さらにそれそれがはずば抜けた天稟を持った双子という要因が加わったことで、不完全ながら『師門』さえコントロールできているのよ』

「あ、えーと」

話はさらにいかがわしい方向に向かう一方だ。

しかし、よく知る幼なじみ達の言葉を簡単に切り捨ててはならない、と感情だけでなく理性のどこかが訴えている。

昨日からの一連の電波話が真実であるかを見極めるなら。

彼女たちが前提として語っている内容が事実であると確認することだ。

事情をよく説明して初さん達に手袋を取つてもらえば。大変失礼とは思うけど、彼女たちなら間違つていたら謝ればすませてもらえるんじやないか。

いや。思い出せ。

昨日さおりさんは「実演」しようと言つていたじゃないか。

僕がこの結論に達することを予想して、前もって証拠を見せておこうとしていたという事か。

しかし、詩紀嬢の言葉を鵜呑みにするなら、さおりさんは鬼に変身して暴れてみようとしていた、という事になるのではないか。

篤史兄さんやジュウ兄さんが必死で止めるわけだ。

「あはは、は」

どうしてこうも理屈が通るんだろう。

こんな陽気の中だというのに、どこか薄ら寒い。

「信じられないけれど、理解はできなくもない、という顔ね」

おおせの通りです。

でも。

「それって、どんな？」

『血が出ていない』者が、本来なら縁遠い鬼と縁を結ぶためには、強引に鬼の下ろしどころを作れば良いのではないかということ。例えるなら身体を媒介にした魂の接ぎ木ね』

「つまり」

自分では口にできない事を、冷静な彼女に言わせる僕は卑怯者だろう。

身体の一部を欠く事で、鬼を呼び込み一体とする

「でも」

あの日。

幼い鈴菜はただ瞬きする以外はびくりとも動かず。

右目を失つた撫葉はただ奇声をあげて笑い続けるのみだった。

頭部に傷を負つて身体の自由を失つた鈴菜、片目と理性を失つ

た撫菜。

その後二人が、鬼と呼ばれる何らかの超自然的な存在に『憑かれる』ことで健康を取り戻したとすれば。あの回復ぶりも納得できる。

「でも、あの娘達が自分で自分を傷つけたわけじゃない」

「その通りよ。それは別の誰かの望み」

不快な話だった。

「例え他人がそれを狙ったとして、僕があの道を選ぶのを誰が予測できたって言うのさ。警察もあの落石に不審な点は無いって断言してた」

「そうね。でもここは珠坂だから」

そう言う詩紀姫は託宣を下す御子のように見えた。

「彼らにだって自分たちの手を汚すなんて考えはなかつたし、口に出すこともなく、ただ心の中で想像するだつたのよ。もしも、もしもあの娘らあたりが大きな怪我をして、よしんばその拍子に

『血が出て』くれるなら、我が一族も安泰となるだろうに、とね。

つまり彼らにも罪はないのよ」

「なら、単なる偶然だよ」

起こつたのが偶然であったとしても、望んだのが当なら罪がない筈がない。

それほどに一族の栄達を願うなら、自分の目をつぶすべきだった。一か八か命懸けの賭を親戚の小さな子供に押しつけようなんて望むような連中がまともであるはずがない。

「ああ、ナナつてつくづくマゾヒストなのね。ここまで言わせようなんて」

そう言ってうつむいた詩紀姫の口元が、わずかにつり上がった。

変わらない景色。天井。

ジュウ兄さん自身が取ったのは釣り竿ケース。

「あと、ほら、ナナ」

「おっと」

放つてよこしたケースを開けると、黒光りする鉄塊が二つ。

どつかで見覚えのある小型の自動拳銃だ。

うわあ。

バッグ・ケース類の中身が想像できるんですけど。

「なんというか、想像より安っぽい、ですね」

取り上げてみると異様に軽い。

「もともと生徒から取り上げたやつよ。ナナが使うのにちょうどいいと思って持ってきた。ガスも弾も十分あるから、持つてきなさい」

「ほれ、ホルスター」

「……」

あほくさ。

大規模サバイバルゲーム大会ですか。

「攻撃開始は17時前後と予知されている。16時には配置を完了しました。また、本作戦は以後、クリケット作戦と呼称する。なお、バナナはおやつにはカウントしない。携帯電話は充電してグルーングモードにしておけ。以上だ」

つくづく、認識が甘かったようです。

詩紀姫とともに屋上に陣取った僕は、双眼鏡をのぞきながら携帯に怒鳴っていた。

「何ですか、何なんですか、あれはあ！」

顔を上げた彼女の顔は常日頃の能面じみたそれではなかった。

一分の隙もないアルカイックスマイル。

「私は北斗の頭『樞』であり、珠坂の紀として偶然を司る

白銀珠比女命。しろがねのひめことその私が彼らの願いを聞き届けたのだから。自

らの意思で何も選択していないナナをしてあの出来事に責任があるなんて、甚だしい思い上がりでしかないのよ」

ああ。

これは人の域を超越し、人の感情を捨て去ったものだ。

まだ理解が足りなかつた。

ここまで聞いてもたとえ話だつた。物語だつた。他人事だつた。

「それから。私の事は天候か何かぐらいに思つておきなさい。人間新川詩紀としての立場上、ナナが気に病むから頭は下げてみせたけれど。私にナナ達の言う善惡の感覚はわからない。そのところを良く理解して。そもそもくばきっとまた無駄に悩むことになるから」

さおりさんの話、先ほどからの話。それらすべてが真実だと、やつと実感を持って納得できた。

血が強すぎれば、特定の鬼との縁が強すぎれば、どうなるか。

信仰の核としての役割を与えられ、鬼を降ろしっぱなしにした者がどうなるか。

さおりさんが言うように魂が脳の判断に干渉するのなら。鬼の魂に支配された新川詩紀姫の思考は既にヒトのそれではない。

きつとこれが、鬼、なんだ。

通学路を埋め尽くす黒い影。赤く光る目、目、目。

『半魚人』

さおりさんの説明は端的といふか、身も蓋もない。

言葉による説明と状況証拠だけしか与えられなかつた疑問に対する、何より直接的な物的証拠が目の前にあつた。

『おいおい、まさか人間相手と思ってたわけじゃないよな?』

レンズ越しの視界の中、篤史兄さんは抜き身の日本刀を手に肩をすくめて見せた。

前衛の配置は校門のすぐ内側。後衛はさらに下がつて玄関前。

「なんでもっと遠くでほかの人たちと一緒に迎撃しなかつたんです! あんなたくさん来るなら、自衛隊に応援を頼むとか、地雷とか仕掛けで近寄らせないようにするとか、もっと方法はあるでしょう!」

『鬼退治の専門家が兵隊さん當てにしてどうするんだよ』

つていうか、あれ、鬼なんだ。

『正面からまつすぐ来たつことは、他の皆が上手いこと誘導してくれたつてこと。まあ見てなさい』

前衛に立つ篤史兄さんの声には多少の緊張感こそあるが、余裕がない訳じゃない。さおりさんに至つては狐狩りでもやつてるような調子だ。

でもあれじや暴動の真正面に立つようなものだ。しかも相手はいかにも話の通じなさそうな人外生命体。戦闘能力が人間を下回るとはとても思えない。

双眼鏡の倍率を上げてみる。

アンバランスなまでにでかい口と、ほとんど首のない胴体と一体化した頭部。なんとかフィッシュとかいうB級ホラー映画のバ

指示棒でべしべしと掌を叩きながら、さおりさんが言った。

「十悟？」

ジュウ兄さんは、ホワイトボードに貼られた珠坂市内の地図に

マーカーできゅいきゅい音を立てて書き込んでいく。

近くの川に凸マーク。そこからひかれた矢印は、長い長い上り

坂を一直線に駆け上る。

矢印の先はここ。紫城高等部。

「ええと、あの」

説明を求める困惑のつぶやきは無視された。

「誰か予知った？」

いや、遡上を確認したのか？ 相当規模が大き

そうだな」

敵予想進路はこの通り。不発弾発見の名目で緊急の避難命令が

発令され、斜線の範囲が無人となる予定だ」

敵言った。敵言いましたよこの人。

で、何が来るって？

「我々の担当区域は最終防衛ライン。優先順位は要人の安全確

保、ついで敵戦力殲滅、それから諸君らの安全、最後に被害局限だ」

それってつまり、あたりは気にせず死んでもがんばれ、って意

味ですか？」

ジュウ兄さんが続ける。

「幸いここは丘の上。視線の通る高いビルや他の丘陵も確保され

るし、マスコミも完全にシャットアウトされるから、基本的に遠

慮は不要だ。派手にいけ」

宮藤姉妹が自分の胸を指さし、顔を見合せた。

さえた目に天井がさえる。背筋が凍る。

同じ建物の中にあんなモノが居る。眠れるわけがない。

あんな能力には抵抗しようがない。でも、例え無駄だと分かっ

ていても無防備な状態をさらせるわけがない。

先人達。斗流十家（ああ、最初は七家か）なんて集団の創始者

達。彼らは自分たちが何を生み出したか分かっているんだろうか。

さおりさんの話を思い返してみる。

要するに、神と同じ力をヒトの意思で制御しようとした、って

事になるんだろうけど。

そのために、よりもよって、本来斗流が対抗すべき敵である

鬼の力なんてものを使つた。

例え鬼が意思らしい意思を示さなかつたとしても、ヒトに理解

できない意思を持っているかもしれないとは、考えなかつたんだ

ろうか。

そんな無茶をやろうとした彼らも、とうに鬼に憑かれていたの

かもしれない。

「今日は篤史さん達と一緒に登校しますからね。逃がしませんよ」

珍しく強い口調で宣言した僕に、篤史兄さんは困惑気味だった。

「なに？ せっかく気を使ってやつたってのに」

どういうわけか婚約者扱いされてしまっているから、そういう

態度に出ても分からぬのだが。あれが実は『くるる』と

## 4／6 金曜日

成功。

べちつ。

「うわ速っ！ 速っ！」

「まるで別人」

空中衝突した二人が恨めしそうな顔を向けてくる。

「もしかしてわたしら避けられてる？」

「もしかしなくても？」

「あのねえ。僕が中学行つてどうするの。すぐ道分かれちゃうんじやないの？」

「あー初終、お前らは適度に加減しろ。さおりもな」

配置は以下の通り。私とリンリン、それから篤史ちゃんと結香ちゃんが前衛担当。宮藤姉妹、十悟とベンベンが後衛だ

「見敵必殺、見敵必殺！」

鈴菜はノリノリ。可愛らしい女子中生が連呼する台詞じやありません、それ。

「で、僕は何をやれば」

「近衛兵。ゴールキーパー。人間の盾」

さおりさんが列挙した中では、最後のが一番本質に近い気がする。なんとなく。

「何を守れと？」

「それはもう、言わずもがなよね」

「やっぱり」

「七夏君が責任持つて連れてきなさい」

「どうせそんなことだろうと。

そこに、ジュウ兄さんがいろいろのった台車を押してきた。

「ほい」

篤史兄さんにゴルフバッグを渡す。

「これは撫葉の分か」

キヤスターのついたケース。楽器の輸送につかわれるようやつだ。

大きさから想定するとチエロか何かが入つていそうだが。

ただ、ペリカンケースにペンギンのステッカーはある意味ミスマッチだと思う。

「これは俺の」

かいう鬼であると知つてしまつた今では、正直ありがた迷惑。

「まさか？」

篤史兄さんは突然真剣な表情になり、

「詩紀に厭きて、俺の魅力に気づいたのか。はあ、俺つて罪作り」

「とつちやだめ！ 篤史ちゃんは私の！」

結香さんに威嚇されてしまいました。

「取りません」

「とか言って、油断させようとしてない？」

「ないない。ありませんって」

ううん、今日の結香さんはより一層子供っぽい気が。

「ぐるるるー」

まだ警戒されている様子。せいぜいチワワ程度の迫力しかない

けど。

そして今度は背後から忍び寄る気配。

「じゃ私と行こう！」

左右から飛びついてきた七瀬姉妹を、身を沈めて紙一重で回避

二人の身につけている焦げ茶に白のセーラー服は紫城の中等部のもの。中等部までと高等部・大学は別校舎で、わりと距離があつたりする。

「うーん、それも一理あるといえなくもないねっ」

「無念」

鈴菜はともかく、撫菜も一見理知的だけど意外と考え無しとみた。

「では私たちが」

「お供いたしましょうか？」

宮藤姉妹が申し出��いた。

どうしても手袋に目がいっちやうな。

『シモン』だっけか。

「私たちにお任せいたければ、登校中の七夏様を完璧に守りきつてご覧に入れます」

「例え暴走戦車が突っ込んでくるような事があつてもご心配には及びません」

戦車で。どういうシチュエーションですかそれ。

「いやあ、女の人に守つてもらうのはさすがに」

別にボディーガードがほしい訳じやないんですが。

「出過ぎた事を申し上げました。影風情がお隣に立とうなどと」

「主家の妨げとなるのは本意ではございません。極力目立たぬようあくまで陰よりお守りいたします」

「あーあ、そんなにかしこまらなくとも普通で。友達だし、僕の方が年下なんですから」

このお姉さん達も、話をちゃんと聞いてるようで、実は全然さっぱり聞いてないんじやからうかと。

「そういう意図は毛頭ありませんから」

危険の有無を別にしても、こんな風にはさわりにくいじゃないですか。女の子には。

後ろを極力気にしないようにして、学校への道を急いだ。

「そう、それでいいわ」

そんな声が、聞こえたような気がした。

クジ引きだというのになぜかお隣席に。代わってくれと言つても誰も交渉には応してくれず。お幸せにと言われる始末。

左側を極力無視しつつ、せいぜい授業に励む振りをするほかなかつた。

でもそれで集中できるわけもなく。

寝不足と空腹の応える四時限目の数学の授業の最中、校内放送のジングルが鳴り響いた。

「3年B組新川篤史、遠野結香、同C組宮藤初・終、2年C組五ヶ瀬七夏。以上の者はただちに化学準備室にまで出頭してください。（ええコレ読むんですかあ？）なお、黙殺した場合には今学期の成績の保証はおろか明日の朝日を挾める保証もありません。以上です」

このセソスはさおりさんだな。間違いなく。しかしなぜに化学準備室。  
……知り合いには仕事を押しつけやすい、って事か。

これじやまるで殿様とお庭番だ。

二人ともメイド服は似合つたけど、きっと網タイツも似合

い事故前からこんなんだったし。

鬼が表に出でこない限り、恐れる必要も身構える必要も無いつてことだ、と思っていいんじゃないかな。

むしろ詩紀嬢が特別なんだろう。

よね。

こうして見るとどちらの双子も変わつてはいるが、思考や行動が人間離れしているわけじやない。少なくとも撫菜・鈴菜の性格は事故前からこんなんだったし。

魔性のものとはいっても、詩紀嬢はやっぱりとんでもなく綺麗で。油断すれば目を奪われそうになる。きっとあれは、魔性のものゆえの美しさなのだろう。

無理矢理に視線を振り切つた。

「さ、行きましょう」  
篤史さんの手を引つ張つて、出発を急がす。  
「こつちはわたしの！」  
反対側の腕に結香さんがとりつく。

「いやー、もてもで困るな。男にも女にも」  
しかし、ひらひらなネグリジェが似合う。似合いすぎる。

トロックのドアなので自動的に施錠される。まるで部屋に食われた気分。

部屋にいたのはさおりさんを含めて8名。

篤史兄さんと結香さん、宮藤姉妹までは予定内。さおりさんまでは予測内。

「やほーなな兄、元気そうで何より」  
「ごぶさた」

「つて、なんで撫菜達が居るんです？」

「猫の手も借りたいからよ」

「はいはーい！にくきうレンタルします」

「延滞ゼロ円」  
撫菜がギャグとばした！？  
よその学校に來てるせいだらうか。結構ハイになつてるとみた。  
「鬼の手も、ですか？」  
初さん終さんが、手袋をはめた手をひらひらさせる。  
「おまえらも、これは上手いこと言つた、って顔してるなよ」  
ブラック、というか自虐的な発言にジュウ兄さんが頭を抱えている。

ああ、初さんがああ言つてゐところをみると、本当に本当なんだなあ。信じたくないけど。  
「ようし注目。それでは作戦を説明する」